

「即身成仏義」を読む

長
澤
弘
隆

「即身成仏義」を読む

目次

■まえがき

■「即身成仏義」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■二経一論八箇の証文

■二頌八句

■六大無礙常瑜伽

■四種曼荼各不離

■三密加持速疾顯

■重々帝網名即身

■法然具足薩般若く円鏡力故実覺智

■あとがき

■まえがき

弘仁年間から天長年間のはじめ、「五大」に「識大」を加えた「六大」説を体系化した宗祖大師は、自らの中核思想となる「即身成仏」論を大成し、『即身成仏義』を撰述した。長安で不空・惠果の密教に学んでから、帰国後もずっと構想していた自らの密教の中核思想をまとめあげたのである。それは、かつて久米寺の東塔の下で感得し、実際は西大寺で見た天平写本の『大日経』の解読できなかつた部分、すなわち「具縁品」以下儀軌類からも得た答えだったかもしれない。

この時期、宗祖大師は高野山造営に忙しかつたはずである。弘仁七年（八一六）、嵯峨天皇から高野山を下賜されると、翌八年（八一七）、實惠や泰範らを高野山に送り造営の準備に着手、次いで九年（八一八）～十年（八二〇）、自らも高野山に上り伽藍の造営をはじめた。宗祖大師の密教にとって集大成となる大事業である。

このような多忙期に、宗祖大師はこの『即身成仏義』のほか『声字実相後』『吽字義』『文鏡秘府論』『篆隸万象名義』など重要な著作を著している。おそらく、宗祖大師のなかではそれまで集積してきた仏教・密教の教理や密教の瑜伽観法体験が「法身説法」「阿字本不生」「六大体大」「四種法身」「三密加持」「声字実相」などに収斂したものと思われる。それらはみな、宗祖大師の独創であり、私的に言えば、法蔵・澄観の華嚴思想をはじめ従来の仏教が自明的に構造化してきた重要教理を、解体し脱構築したものである。その代表の一つがこの「即身成仏」であり、従来、はてしなく長い無時間的な時間の菩薩行の果てにあつたサトリ・成仏（「三劫成仏」）を脱構築し「この身を捨てずして」「現身において」「速疾に」の成仏にしたのである。加えればさらに、あらゆるものが無自性・空で、お互いに相即相入し合つて融通無礙の真如法界を当体とする法仏「ビルシヤナ」が真実態としてただ在るだけなのに対し、法仏「大ビルシヤナ」に自受用身と他受用身とを付与し、説法、すなわち真実の言語化を可能にしたのも（「法身説法」）、宗祖大師の独創であり、あらゆるものが「阿字」一字に包摂される、あるいはあらゆるものはコトバで発せられて（言語化されて）初めて存在たり得る、すなわち「コトバは存在である」も、従来の教理構造の脱構築だつた。

蛇足を加えれば、宗祖大師の書で注目すべき「破体書」（雑体書）は、『聾瞽指歸』『益田池碑銘』『破体心経』等に見られるが、一著作・一碑文・一経が篆書・隸書・楷書・行書。草書の五体のほか数多くの変体書法で書かれている。「五筆和尚」どころではない。これも中国の書法を充分に研究し身につけた宗祖大師でしかできない独創で、日本の書の常識の脱構築である。

その脱構築は『弁頭密二教論』における頭密二教の峻別、「応化の開説を名づけて頭教という。ことば頭略にして機に逗えり。法仏の談話これを密蔵という。ことば秘奥にして実説なり」にはじまっているが、実際は長安の日々から熟成してきたものである。在唐二十年の留学義務を破って帰国を急いだのは、旧仏教の脱構築、すなわち南都の学解仏教の教理訓誥学から脱して、不空や恵果のように国家を動かし人々を安寧に導く現実対応の仏教への脱構築、「現実即真実」の仏教に、心はやったにちがいない。

時に、『即身成仏義』を読むにあたって、どうやら「即身」に主題がありそうなのだが、わかっているようで実はわかっていない「成仏」について改めて考えておく必要がある。

通常の仏教教理では、「成仏」とは「ブツダ（覚者）になること」「釈尊のように、無我・無執著を覚ること」「無自性・空の現等覚（サトリ）が心に現前すること」「彼岸に到ること」「無余涅槃に入ること」等々、具に言えば、瞑想行（止観行）によって、心をやむことなく去来する雑念を抑滅し、深い無念無想の境地で、あらゆるものが無自性・空であるという直観智が心に現前すること。従来 of 仏教では、これに至るのに三劫という途方もない時間の菩薩行を要する。その困難なことは『華嚴経』『入法界品』に説かれる善哉童子の求法物語からも想像できる。ちなみに中国華嚴の解釈のなかには、善哉童子が訪ねる五十三人の善知識を菩薩の五十二位に最後の普賢菩薩の一位とするものがある。

一方、密教が言う「成仏」は、真言行者が手に本尊の象徴である印契を結び、心に本尊を観想し、口に本尊の真言を称え、本尊の「三密」と行者の「三密」とが一体化し「三密相應」する、それは行者が本尊の仏身と等しくなること、行者が本尊

の身に入り本尊がわが身に入り、相即相入し合って無礙であること、その「即身」においては、「円鏡力の故に実覚智」（「薩般若」「一切智智」）が具足されている、それを「成仏」と言う。

この成仏論の背景には、煩惱に染まって「仏性」のない衆生が仏道にめざめて長い修行の結果成仏に至る顕教の前提と、本有の菩提心の自覚・発起を起点として衆生身が速疾に本来の仏身に転じる密教の前提とのちがいがあある。宗祖大師は大乗の「仏性」「如来蔵」「本来成仏」論と同じ系譜の「菩提心」説、すなわち密教の「本有菩提心」説（本覚門）を足場にして「即身成仏」を創案し、従来の「三劫成仏」を脱構築したのである。

もう一つ言えば、「即身」、すなわち「重々帝網」は法蔵の「十玄縁起」や澄観の「重々無尽縁起」の「事事無礙法界」に依っているが、この華嚴の法界縁起説をただの真如法界説に置くことなく、「六大体大」説を媒介に「能生不二」の成仏論に脱構築したのである。

『即身成仏義』は冒頭から「三劫成仏」と「即身成仏」のちがいを、「即身成仏」の論拠を明かすことからはじまっている。南都の華嚴や法相・三論、あるいは最澄の天台からも批判が出されたに相違なく、それらに正面から答える形で「二頌八句」が述べられている。以上、冒頭、「成仏」について私見を明かしておいた。

時に、「成仏」とは仏教の根本テーマながら、その実体験となると、今の真言僧侶のなかに「即身成仏」の経験者がいるかどうかあやしい。曹洞宗の禪家のなかにいても不思議ではないが、覚った禪家は自から言うものではない。今私たち僧侶が口にする「成仏」は頭で想像したり考えたり理解した理念・知識であり、学術の世界では教理概念にはかならない。しかし、この『即身成仏義』から伝わってくる「成仏」は、宗祖大師が修習練磨したであろう華嚴の「海印三昧」や密教の三摩地法の経験則であり「実覚智」である。

この『即身成仏義』を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏經テキストデータベース版（大正No.2161）を依用した。だが、ところどころ誤記があり、「高野山アーカイブ」の「定本 即身成仏義」を参照しながら、私なりに直した。

「原文」に続いて「書き下し」を付した。「書き下し」に当っては「定本 即身成仏義」『弘法大師全集』を参照した。「書き下し」に続いて「私訳」を付けた。私なりの現代語訳である。

「私訳」のあとの「註記」は、専門語や難解な語の解説である。できるだけ正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。ご参考になれば幸いである。

さらに、ご参考までに「付記」を付けておいた。

後期高齢のせいか、パソコンの文字入力や漢字変換のミスに鈍感になった。誤字・脱字がありましたらご容赦を。

今回は、この春遷化された大学時代の学友で同じ宗派の法友松本照敬師の「即身成仏義」（『弘法大師空海全集』第二巻）に目を凝らし、松長有慶博士の『訳注 即身成仏義』のお世話になった。それぞれ現代語訳の工夫が手に取るように伝わってきて、宗祖大師の難解な漢文を現代語に変換する苦闘の跡がしのばれた。とても助けられた。学恩に至心感謝である。私は意訳は用いず、できるだけ原文に添って直訳した。

難解な言葉や表現について、小田慈舟博士の『即身成仏義講説』・金岡秀友博士の『空海・即身成仏義』・頼富本宏博士の『即身成仏義』そして同じ宗派の碩学宮坂宥勝博士・福田亮成博士の著も参照させていただいた。時々、古い時代の学匠の解釈にも接したが、うなずくことが多くあった。とくに宥快の『即身成仏義鈔』（『真言宗全書』）にはうなずいた。こうした先学のご労作があつてはじめて、私のような在野の草学道が宗祖大師の著作が読めるのである。感謝のほかない。

■「即身成仏義」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■題名 即身成佛義 遍照金剛撰

■二經一論八箇の証文

【原文】

問曰。諸經論中皆說三劫成佛。今建立即身成佛義有何憑據答。祕密藏中如來如是說問。彼經說云何答。金剛頂經說。修此三昧者現證佛菩提此三昧者謂大日尊一字頂輪王三摩地也又云。若有衆生遇此教晝夜四時精進修。現世證得歡喜地。後十六生成正覺謂此教者。指法佛自內證三摩地大教王。歡喜地者。非顯教所說初地。是則自宗佛乘之初地。具說如地位品中。十六生者。指十六大菩薩生。具如地位品說也又云。若能依此勝義修。現世得成無上覺又云。應當知。自身即爲金剛界。自身爲金剛。堅實無傾壞。我爲金剛身。大日經云。不捨於此身。速得神境通。遊步大空位。而成身祕密。又云。欲於此生入悉地。隨其所應思念之。親於尊所受明法。觀察相應作成就云云此經所說悉地者。明持明悉地及法佛悉地。大空位者。法身同大虛而無礙。含衆象而常恒。故曰大空。諸法之所依住故號位。身祕密者。法佛三密等覺難見十地何窺。故名身祕密。又龍猛菩薩菩提心論說。眞言法中即身成佛故是說三摩地法。於諸教中闕而不書是說三摩地法者法身自證三摩地。諸教者他受用身所說諸顯教也又云。若人求佛慧。通達菩提心。父母所生身。速證大覺位。依如是等教理證文成立此義。

【書き下し】

問うて曰わく。諸の經論の中に、皆三劫成佛を説く。今即身成佛の義を建立する何の憑據か有りや。
答う。祕密藏の中に如來是くの如く説きたもう。

問う。彼の經に説くこと云何。

答う。金剛頂經に説かく。此の三昧を修する者は現に佛菩提を證す、と。(此の三昧は、謂く大日尊の一字頂輪王の三摩地なり)。

又云わく。若し衆生有つて此の教に遇い、晝夜四時に精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成ず、

と。(謂く此の教は、法佛の自内證の三摩地大教王を指す。歡喜地は、顯教に説く所の初地に非ず。是れ則ち自宗佛乘の初地

なり。具に説くこと地位品の中の如し。十六生とは、十六大菩薩生を指す。具には地位品に説くが如くなり)。

又云わく。若し能く此の勝義に依つて修すれば、現世に無上覺を成ずることを得。

又云わく。當に知るべし。自身即ち金剛界と爲る。自身金剛と爲らば、堅實にして傾壞無し。我金剛身と爲る。

大日經に云わく。此の身を捨てずして、神境通を逮得す。大空位に遊歩して、身祕密を成ず。

又云わく。此の生に於いて悉地に入らんと欲すれば、其の所應に隨つて之を思念せよ。親に尊の所に於いて明法を受け、

觀察し相應すれば成就を作す、と云云。

此の經に説く所の悉地とは、持明の悉地及び法佛の悉地を明かす。大空位とは、法身は大虛に同じくして無礙なり。衆象

を含んで常恒じょうこうなり。故に大空と曰う。諸法の依住する所の故に位と號す。身祕密とは法佛の三密なり。等覺も見難く、十地も何ぞ窺わん。故に身祕密と名づく。

又龍猛菩薩りゅうみょうぼうさつは菩提心論に説かく。眞言法の中にのみ即身成佛するが故に是に三摩地法を説く。於諸教の中に於いては闕き書せず。(是に説く三摩地法とは、法身自證の三摩地なり。諸教は他受用身たじゅうようしんの説く所の諸々の顯教なり)。

又云わく。若し人佛慧ぶつてを求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺位だいかくいを證す。是くの如き等の教理證文に依つて此の義を成立す。

【註記】

①三劫成佛…密教以前の大乗までが、菩薩がサトリ(成仏)に至るのは、永遠に等しい三劫という長い長い時間、六波羅蜜行に励んだその果てだと言つた成仏論。三劫とは三天阿僧祇劫、すなわち四十三億二千万年(一劫)の三倍。

②即身成佛…『金剛頂經』の「五相成身觀」などで説かれ、宗祖大師が大成した密教の成仏論。永遠に等しい長い時間の修行を要せず、「発心すれが即ち到る」、今この生身(現身)において仏と一体となり(「入我我入」、仏と同じ仏身となるのである)。

③憑據…典拠、根拠、拠り所。

④一字頂輪王…一字金輪仏頂、一字金輪聖王。「一字」は種字の「ボロンbrim」。「頂」は仏頂尊の意、「輪」は転法輪・転輪法を説くこと。「王」は金輪王。金輪・銀輪・銅輪・鉄輪の第一。大日如来が変じた仏頂尊。仏頂尊のすぐれた仏徳を持つ

転輪聖王の第一で、一字真言「ボロン」を仏格化した仏尊。

⑤ 歡喜地：『大日經』に説かれる、菩薩の「十地」の初地。菩薩が一劫目の六波羅蜜行を終え、人法二空の理を体得して歡喜する心位。頭教で言う初地ではない。

⑥ 十六生：『金剛頂經』に説かれる十六大菩薩生。金剛界マンダラの、東方阿閼如來の四親近、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜、南方宝生如來の四親近、金剛宝・金剛光・金剛幢・金剛笑、西方阿彌陀如來の四親近、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語、北方不空成就如來の四親近、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳。

東方阿閼如來の四親近、金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜は歡喜地、南方宝生如來の四親近、金剛宝・金剛光・金剛幢・金剛笑は離垢地（二地）→遠行地（七地）、西方阿彌陀如來の四親近、金剛法・金剛利・金剛因・金剛語と、北方不空成就如來の四親近、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳は、不動地（八地）→法雲地（十地）に当る。

⑦ 法佛：サトリの当体としての法身仏。華嚴では盧舍那仏。密教では法身大日。

⑧ 自内證：仏の自心に現觀されたサトリ。仏にしかわからないサトリ。

⑨ 自宗佛乘：わが宗の教え。

⑩ 地位品：この名の仏典は現存しない。そのことに四説ある。その一は、鎌倉期の自性上人（槇尾山西明寺）が言う、宗祖大師は唐でこれを披見したが、未だ日本に將來されていない、という説。その二は、賴瑜僧正などが言う、『大日經』及び『大日經疏』「住心品」の「十地段」という説。その三は、有快僧正（『即身成仏義鈔』）が言う、『華嚴經』十地品（『十地經』）だという説。その四は、同じく賴瑜僧正が言う、『分別聖位經』を指すという説。

⑪ 傾壞：傾いてだめになること、傾き壊れること。

⑫ 金剛身：金剛界の仏身。一切の如來たちと同じ仏身。

⑬ 身秘密：秘密の仏身。法仏（法身大日）の三密は、仏と等しい菩薩にも見えない。ましてその下位の「十地」の菩薩などには見るできない。その意味で、身秘密なのである。

⑭ 悉地・成就、サトリ。

⑮ 持明・陀羅尼・真言。あるいはそれを受持すること。

⑯ 衆象・万象。

⑰ 常恒・常に。

⑱ 龍猛菩薩・この龍猛 (Nāgārjuna) は、インド中観派の論師龍樹ではなく、密教伝法の龍猛。すなわち、金剛薩埵から密教を受法し龍智に伝えたとされる龍猛。

⑲ 菩提心論・龍猛の作で不空の漢訳とされている『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』。不空の作とも言われる。

⑳ 他受用身・法身大日の四種身（自性身・受用身・変化身・等流身）の内、受用身に自受用身と他受用身とある。自受用身は、大日如来が自受法楽のために自らのサトリを説くのに対し、他者救済すなわち衆生済度のために説法をする身。

㉑ 佛慧・サトリの智慧。

㉒ 大覺位・サトリの心位。

【私訳】

（ある論者が）問うて言うに、（大乘までの）いろいろな仏典においてはみな、菩薩が成仏に至るのは、永遠に等しい三劫という長い長い時間、六波羅蜜行に励んだその果てのことだという成仏論を説く。そこに「発心すれが即ち到る」、今この生身（現身）において仏と一体となり（「入我我入」、仏と同じ仏身となる、などという説を立てるのには、何の根拠があるのか、と。

答えて言うに、密教の経論のなかで如来がそのように説いておられる、と。

（また）問うて言うに、どんな密典に説かれているのか、と。

答えて言うに、『金剛頂経』（不空訳『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時处念誦成仏儀軌』（『金輪時处軌』）に、「此の三昧を修

する者は現に佛菩提を證す」と説かれている。(この三昧というのは、大日如来が變じた一字頂輪王の三摩地である)と。

さらに言うに、(金剛智訳『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地經』(『三摩地軌』)には)「若し衆生有つて此の教に遇い、晝夜四時に、精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成す」と。(この教えは、サトリを当体とする法身仏の自心に現前したサトリの偉大な教王と言うべき境界である。歡喜地というのは顯教が説く「十地」の初地のことではなく、わが宗の(『大日經』「住心品」の十地段が説く)教えて言う初地である。具さには「地位品」に説かれている通りである。十六生というのは、十六大菩薩生のこと、具には「地位品」に説かれている通りである)。

さらに言うに、(不空訳『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』(『觀智儀軌』)には)、「若し能く此の勝義に依つて修すれば、現世に無上覺を成ずることを得」と。

さらにまた言うに、(『三摩地軌』には)「當に知るべし。自身即ち金剛界と爲る。自身金剛と爲らば、堅實にして傾壞無し。我金剛身と爲る」と。(また)『大日經』(「悉地出現品」)には、「此の身を捨てずして、神境通を逮得す。大空位に遊歩して、身祕密を成す」と。

加えてまた言うに、(『大日經』「真言行學處品」には)「此の生に於いて悉地に入らんと欲すれば、其の所應に隨つて之を思念せよ。親に尊の所に於いて明法を受け、觀察し相應すれば成就を作す」と。

この經典に説く「悉地(サトリ、成就)」とは、陀羅尼・真言を誦持して得るサトリと法身仏のサトリを明かしている。大空位というのは、法身は広大な虚空と同様にあらゆるものが相即相入し合つて重々無礙であり、万象を含んで始めなく終りがない。その故に大空と言う。諸法はそれに依拠しているから位と言うのである。身祕密とは、法身仏の身・口・意の三密で、等覺位の菩薩でも見ることが不可能で、まして十地の菩薩にどうして見えようか。だから身祕密と言うのである。

また、龍猛菩薩が『菩提心論』に、「眞言法の中にのみ即身成佛するが故に是に三摩地法を説く。於諸教の中に於いては闕き書せず」と説いている。(ここに言う三摩地法とは、法身大日の自心に現前したサトリの境地である。(わが宗以外の)いろいろな教えは、法身大日が他者救済・衆生濟度のために説法する顯教である)。

さらにまた言うに、(同論に)「若し人佛慧ぶつてを求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺位たいかくいを證す」と(説かれて
いる)。このような教理の証文によつて、即身成仏の意味が成立しているのである。

【付記】

宗祖大師は冒頭、二經一論に説かれる八箇の証文を出し、「即身成仏」の論拠・經証とする。整理すれば、「二經」とは『金剛頂經』と『大日經』、「一論」とは『菩提心論』、「八箇の証文」とは、次の通りである。

- ①「此の三昧を修する者は現に佛菩提を證す」。
(金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌) (『金輪時処軌』)。
- ②「若し衆生有つて此の教に遇い、晝夜四時に、精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成ず」。
(『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地經』) (『三摩地軌』)。
- ③「若し能く此の勝義に依つて修すれば、現世に無上覺を成ずることを得」。
(『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』) (『觀智儀軌』)。
- ④「當に知るべし。自身即ち金剛界と爲る。自身金剛と爲らば、堅實にして傾壞無し。我金剛身と爲る」。
(『三摩地軌』)。
- ⑤「此の身を捨てずして、神境通を逮得す。大空位に遊歩して、身祕密を成ず」。
(『大日經』) (『悉地出現品』)。
- ⑥「此の生に於いて悉地に入らんと欲すれば、其の所應に隨つて之を思念せよ。親に尊の所に於いて明法を受け、觀察し相
應すれば成就を作す」。

(『大日經』) (『真言行行学処品』)

⑦「眞言法の中にのみ即身成佛するが故に是に三摩地法を説く。於諸教の中に於いては闕き書せず」。

〔菩提心談論〕

⑧「若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺位を證す」。

〔菩提心談論〕

ちなみに、⑤は眞言宗の「引導法」にも引かれる。すなわち「亡者五大加持」で、死者の（実際には）「六大」を加持し、死体を六大所成（の大日如来と等同）とみなし、次いで「八葉白蓮一肘間 炳現阿字素光色 禪智具入金剛縛 召入如来寂靜智」と唱えて、死者本有の心月輪に大日如来の寂靜智を召き入れ、次にこの偈頌を唱えて「即身成仏」したものとす。

■二頌八句

【原文】

如是經論字義差別云何。頌曰、

六大無礙常瑜伽 體

四種曼荼各不離 相

三密加持速疾顯 用

重重帝網名即身 無礙

法然具足薩般若 法佛成佛

心數心王過刹塵 無數

各具五智無際智 輪圓

圓鏡力故實覺智 所由

所申此四句明成佛一字

釋曰。此二頌八句以歎即身成佛四字。卽是四字含無邊義。一切佛法不出此一句。故略樹兩頌顯無邊德。頌文分二。初一頌歎即身二字。次一頌歎成佛兩字。初中又四。初一句體二相三用四無礙。後頌中有四。初舉法佛成佛。次表無數。三顯輪圓。後出所由。

【書き下し】

是くの如き經論の字義、差別云何。頌に曰わく、

六大無礙むげにして常に瑜伽ゆがなり 體

四種曼荼おのおの各々離れず 相

三密加持そくしつして速疾そくしつに顯わる 用

重重帝網たいもつなるを即身そくしんと名づく 無礙

法然ほうねんに薩般若さはんによを眞足まんだして 法仏成仏

心數しんじゆしんのうせつちん心王利塵しんじゆしんのうせつちんに過ぎたり 無數

各々五智ごちむさいち無際智むさいちを具す 輪圓

圓鏡力えんきやうりきの故ゆゑに實覺智じつかくちなり 所由

釋に曰わく。此の二頌八句を以つて即身成佛の四字を歎ず。即ち是の四字に無邊の義がんを合せり。一切の佛法は此の一句を出
でず。故に略して兩頌を樹て無邊の徳を顯わす。頌の文を二に分かつ。初めの一頌は即身の二字たんを歎じ、次の一頌は成佛の
兩字を歎ず。初めの中に又四あり。初めの一句は體、二に相、三に用ゆづ、四に無礙なり。後の頌の中に四有り。初めに法佛の
成佛を擧げ、次に無數を表わし、三に輪圓りんえんを顯わし、後に所由を出だす。

【註記】

- ①六大無礙：「六大」はあらゆる事物・事象をそうあらしめている實在要素。「地」「水」「火」「風」「空」の「五大」に「識」。「地」は土・大地。堅固なもの・固定的なもの。「水」は水・液体・湿気。湿り気・潤おすもの・溶かすもの・包摂。「火」は燃焼・熱・破壊。燃えるもの・熱いもの・強い力。「風」は空気・流動・流体・拡大。動くもの・広がるもの。「空」は大気・天空・空中・虚空。広い空間・包括的なはたらき・無礙・障礙のないこと。「識」は事物・事象を認識するはたらき。「五大」と無礙（相即相入）の関係にある。宗祖大師はこの「六大」が法界宇宙の本体とした（「六大体大」）。最初の句の下に記されている「體」とは「体大」、すなわち「六大体大」の意味である。「無礙」は、あらゆる事物・事象は「六大」が互いに相即相入して何の障礙もないこと。
- ②四種曼荼：宗祖大師が説く四種のマンダラ。「大マンダラ」（仏尊等を絵図で画いたマンダラ）、「三昧耶マンダラ」（仏尊等をその尊の象徴（持物や印）で画いたマンダラ）、「法マンダラ」（仏尊等をその種字（梵字）で書いたマンダラ）、「羯磨マンダラ」（仏尊等を木造・鑄造で表現した立体マンダラ）。この四種は本質的には同じ一つのものである。法界宇宙の姿を仏尊の集合図で表わしたものと意味で「相」（四曼相大）と言う。
- ③三密加持：「三密」は身（密）・口（密）・意（密）。行者（人間）の「三密」と仏の「三密」とがあり、行者がマンダラの一尊（仏）の印を結び、口にその仏の真言を唱え、心中にその仏を思い浮かべてそこに一点集中し、「本尊わが身に入る、われ本尊の身に入る」（「入我我入」「加持感応」）の境地（三摩地）に入ること。仏・本尊とは法身大日。法身と不二体になるということは円融無礙の法界の仏身になること。そのことを「用」（三密用大）と言う。
- ④重重帝網：「重々」は重なり合っていること。「帝網」は帝釈天の宮殿を飾る、結び目に寶石をちりばめた網。その元は、ヒンドウの武勇神インドラが天空で雷鳴とともに発する雷光の網で、インドラ・ジャール（インドラの網）。宗祖大師は、あらゆる事物・事象が円融無礙にあること（華嚴の澄観が言う「事事法界」）を「重々帝網」に喩えた。
- ⑤即身：この身（生身・現身）に即して、この身において、この身のまま、といった意。

⑥ 法然：あるべくしてそうあるように、さながらに、の意。

⑦ 薩般若：サンスクリットで「sarva-jñāna」一切智。あるいは「sarva-jñā-jñāna」一切智智。

⑧ 心数心王：六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）と末那識・アラーヤ識・庵摩羅識の九識が「心王」。その他の心作用が「心数」。

⑨ 刹塵：「刹」は国土。国土の塵。すなわち無数・無限の意。

⑩ 五智無際智：「五智」は大日如来の仏智で、「法界体性智」「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」。「無際智」はその他の限りなき智慧。

⑪ 圓鏡力：丸い鏡にあらゆるものが映るように、大日如来の仏智は万事・万象を映し出す。

⑫ 實覺智：真実を映し出す仏智。

⑬ 體相用：「體」は本体、「相」は本体の姿・機能、「用」はそのはたらき。

⑭ 輪圓：あらゆる仏徳を具足した円輪、すなわちマンダラ。マンダラの諸尊は円輪のなかに画かれる。

【私訳】

そのような経論の八箇の証文が言う（「即身成仏」の）意味のちがいはどのようなものか。

偈頌にして（答えて）言うと、

地・水・火・風・空・識の「六大」は、互いに相即相入し合って障礙なく（体）、

大・法・三・羯の「四種曼荼羅」は、それぞれ本質は異にせず一つのものであり（相）、

仏と行者と身・口・意の「三密」が一体となり互いに感應し、行者に仏身がすみやかに顕わとなる（用）、

（そのように）あらゆるものが重なりあつて渉入し合い、帝釈天の宮殿のかざり網の寶石のように相互に映しあっている

ホロニツクな境地を「即身」と言う（無礙）。

(その境地では) そうなるべくしてそうなるように (法爾自然に)、一切智を具足し (成仏)、

六識・末那識・アーラヤ識・庵摩羅識の九識 (心王) とその他の認識作用は無数・無限であり (無数)、

それぞれ「法界体性智」「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」とその他の仏智を具足する (輪圓)。

大きく丸い鏡があらゆるものを映し出すように、「五智」「無際智」もそうであるから、真実を映し出す仏智である (所由)。

(これを) 註釈して言うと、この二頌八句によつて「即身成仏」の四字を讃えた。すなわち、この四字に無限の意味が含まれていて、一切の仏法はこの一句を出ない。故に、それを要略して二つの偈頌にし無限の無邊の徳を明らかにしたのである。偈頌の文を二つに分けた。初めの一頌は「即身」の二字を讃え、次の一頌は「成仏」の二字を讃えた。初めの偈頌のなかにまた四つの意味があり、初めの一句は「体」、二句は「相」、三句は「用」、四句は「無礙」である。後の偈頌のなかにも四つの意味があり、初めは法仏の「成仏」を挙げ、次に「無数」を表わし、三に「輪圓」を顯わし、四に「所由」を出だした。

【付記】

宗祖大師の「即身成仏」論の中核となるこの「二頌八句」を平易な現代語訳にするのは至難である。前述した【私訳】とは別に、敢えて私の現代語訳を明かすと、

1 広いこの世界に存在する、ありとあらゆるものの元となっているのは「六大」(地・水・火・風・空と識)で、「六大」はそれぞれお互いにかかり合い(相即相入して)、相互依存の関係にある。それ自体で存在しているものではない(無自性・空)。無垢清浄なものである。あらゆるものはこの「六大」を元として存在する(六大能生)。

2 その「六大」が生み出した(六大能生の)マンダラに、「大(現図)マンダラ」と「法(種字)マンダラ」と「三昧耶(象徴)マンダラ」と「羯磨(所作)マンダラ」という四種があるのだが、それら四種は本質的に一つのものであり、仏尊等の表現方法がちがうだけである。

3 そのマンダラの仏尊のどれか一つを選び（結縁）、その仏尊の「印」を自分も結び、その仏尊の「真言」を唱え、その仏尊のすがたを自分の心中に観想して、自分とその仏尊とが一体となって感応し合えば（三密加持）、自分の身体がその仏の仏身と等しくなった状態が瞬時に顕わになる。

4 その「三密加持」の境地というものはあたかも、ヒンドウの雷神インドラ天の稲妻の網の如く、帝釈天（インドラ天が転じた仏教の護法神）の宮殿のかざり網にちりばめられた寶石が、互いに照らし合うのと同じく（重々帝網）、マンダラの仏尊と「重々帝網」の状態になっていることを「即身」と言うのである。

5 その境地においては、さながらに、仏の智慧（一切智、あらゆる事物・現象が無自性・空であると見抜く智慧）が心に具わり、

6 六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）や八識（六識に、自我意識の末那識と根本識としてのアーラヤ識を加えたもの）といった認識主体（心王）や、それに相応する認識作用（心数）は無限であるが、

7 その各々に、大日如来の五智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）やその他の限らない仏の智慧が具わっている。

8 それら仏の智慧は、あらゆるものが鏡に映るように、行者の心の大きく丸い鏡に映し出される真実の智慧である。

■六大無礙常瑜伽

【原文】

謂六大者五大及識。大日經所謂。我覺本不生。出過語言道。諸過得解脫。遠離於因縁。知空等虚空。是其義也。彼種子真言曰 **वसवधमलिकेशर**。爲 **阿** 字諸法本不生義者即是地大。縛字離言說謂之水大。清淨無垢塵者是則囉字火大也。因業不可得者訶字門風大也。等虚空者欠字字相即空大也。我覺者識大。因位名識果位謂智。智即覺故。梵音沒駄冒地 **वसव** 一字之沒駄名覺冒地曰智。故諸經中所謂三藐三冒地者。古翻云遍知新譯等覺。覺知義相涉故。此經號識爲覺者從

世間の塵を清淨にする「清淨無垢塵」の字義を持たせた。

④因業不可得：「風大」の種字「詞字 ha」はサンスクリットで「因・原因」の意味を持つ「hetu」を語源とし、「風大」に世間の因果のもとになる行為を吹き飛ばす「因業不可得」の字義を持たせた。

⑤等虚空：「空大」の種字「欠字 haḥ」の語原「hā」(法字)はサンスクリットで「虚空」という意味。それにより「空大」に「等虚空」の字義を持たせた。

⑥我覺：「我」は大日如来。大日如来が本不生を覺った、という意味。

⑦梵音：サンスクリットの発音。

⑧沒駄冒地：サンスクリットで「bodha-bodhi」ボダ・ボーデイ。

⑨三藐三冒地：サンスクリットで「samyaksambodhi」サムヤクサンボーデイ。

⑩遍知：遍く一切諸法の無自性・空を知ること。

⑪等覺：等正覺。仏と智慧・功德が等閑なサトリ。菩薩の修行の段階の五十二位のうち五十一位の境地。

【原文】

又金剛頂經云。諸法本不生。自性離言說。清淨無垢染。因業等虚空。此亦同大日經。諸法者謂諸心法。心王心數其數無量。故曰諸心識名異義通。故天親等以三界唯心成立唯識義。自餘同上說。又大日經云。我即同心位。一切處自在。普遍於種種。有情及非情阿字第一命。嚩字名爲水。囉字名爲火。訶字名爲風。佉字同虚空。此經文初句我即同心位者。所謂心則識智也。後五句即是五大。中三句者表六大自在用無礙德。般若經及瓔珞經等亦說六大義。

【書き下し】

又、金剛頂經に云わく。「諸法は本不生なり、自性は言説を離れたり、清淨にして垢染無し、因業なり、虚空に等し」と。此

れまた大日經に同じ。諸法とは謂わく諸々の心法なり。心王心數、その數無量なり。故に諸と曰う。心と識と名を異にして義は通ぜり。故に天親等は三界唯心を以つて唯識の義を成立す。自餘は上の説に同じ。又、大日經に云わく。「我即ち心位に同じなり。一切處に自在して、普く種種の有情と及び非情に遍す。阿字は第一の命なり。嚩字を名づけて水と爲し、囉字を名づけて火と爲し、吽字を名づけて風と爲し、佉字は虚空に同じ」と。此の經文の初句に「我即ち心位に同じなり」とは、謂う所の心は則ち識智なり。後の五句は即ち是れ五大。中の三句は六大の自在の用の無礙の徳を表わす。般若經及び瓔珞經等にまた六大の義を説けり。

【私訳】

また、『金剛頂經』（『三摩地軌』）に言うに、「諸法は本不生なり（「地大」、自性は言説を離れたり（「水大」、清淨にして垢染無し（火大）、因業なり（風大）、虚空に等し（空大）」と。これは『大日經』と同じで。諸法（さまざまなる事物事象の屬性）とは物質的なものだけでなくいろいろな精神現象でもある。心王（六識）に末那識・アーラヤ識・菴摩羅識）・心數（その他の認識作用）は、その數に限りはない。だから諸と云うのである。心と識とは、言い方はちがうが意味は同じである。だから、世親など唯識の論師は「三界唯心」（三界（欲界・色界・無色界）のあらゆる事物事象はただ心から生じたもの）を説いて唯識説を成り立たせた。その他のことは前の『大日經』の説と同じである。

また、『大日經』『阿闍梨真實智品』に言うに、「我即ち心位に同じなり。一切處に自在して、普く種種の有情と及び非情とに遍す（私（行者）は心中（心位）に「ウン」で布字された「識大」に等しい。「識大」は）あらゆるところで自在であり、

普く命あるもの・命なきものすべてに遍満する。阿字は生命の初源（地大）である。嚩字を「水（大）」と言ひ、囉字を「火（大）」と言ひ、鉞字を「風（大）」と言ひ、佉字は虚空（「空大」）に同じ」と。この經文のはじめの句に「我即ち心位に同じなり」と言う「心」とは、「識」あるいは「智」である。後半の五句は「五大」のこと、中間の三句は「六大」の自在の用（はたらき）の無礙の特長を表わす。『般若經』や『瓔珞經』等にまた「六大」の説を説いている。

【註記】

①心法…精神現象。

②天親等…世親などの唯識派の論師。

③三界唯心…「三界」（欲界・色界・無色界）のあらゆる事物事象は心から生じたもの、という意味。

④我即ち心位に同じ…松長有慶博士（『訳注 即身成仏義』）によれば、「我」の解釈に古来「行者（阿闍梨）」説と「大日如来」説とがあり、「行者（阿闍梨）」説は、「行者（阿闍梨）」は『大日經』が説く「布字觀」の際、「ア字」を心位（心臓の位置）に布くから」と言ひ（宥快『即身成仏義鈔』。「大日如来」説は、「我は大日」としつつ、「布字觀」中に「ア字」を行者の「心位」（「識大」）の上に布き、「ア字」と「心位」とが同等になると言う（小田慈舟『即身成仏義講説』）。私は「我」を「行者」とし、「私（行者）は心中（心位）に「ウン」で布字された「識大」に等しい」と解釈した。

⑤有情・非情…命ある有情と、命なき非情。

⑥鉞字…卍字。『大日經』「阿闍梨真實智品」は、この鉞字（卍・ウン・卍）をもつて「風大」とする。通常は「カ・訶」。

⑦瓔珞経…『菩薩瓔珞本業經』。菩薩の階位を説いた經典。中国における偽經との説がある。

【付記】

大師教学の根幹の一つ「六大（体大）」説は、インド哲学からはじまるマテリアルな元素論の「五大」説に、精神現象として

の「識大」を加え、法身大日をはじめあらゆるものがこの「六大」から成っている（六大所成）として、伝統的な「五大」説を脱構築した。その真意を推し量るのは、私のような在野の草学道の及ぶところではないが、学術の世界をのぞき見ても教理術語が自明のように飛び交っているだけで、「六大（体大）」説を心から納得できる教理的・思想的解釈にはお目にかからない。さほどに難しい。

さらに私にはよくわからないのが、「六大」のうちの「五大」とその「種字」や「機能」との関係である。それについては前文の【註記】で私なりの解釈を書いていたが、教理的根拠があつての解釈ではない。よくわからない点を改めて示すと、

- ①「地大」::「アa」（アヌットウパーダ anupada 不生）——「本不生」（『大日経』『即身義』）、「諸法本不生」（『金剛頂経』）。
 - ②「水大」::「ヴァ va」（ヴァーチユ ve 言説・言葉）——「出過語言道」（『大日経』『即身義』）、「自性離言説」（『金剛頂経』）。
 - ③「火大」::「ラ ra」（ラジャス rajas 塵・垢れ）——「諸過得解脱」（『大日経』『即身義』）、「清浄無垢染」（『金剛頂経』）。
 - ④「風大」::「カ ha」（ヘートウ hem 因・原因）——「遠離於因縁」（『大日経』『即身義』）、「因業」（『金剛頂経』）。
 - ⑤「空大」::「キャ kha」（クハ kha 虚空）——「知空等虚空」（『大日経』『即身義』）、「等虚空」（『金剛頂経』）。
- つまり、「地大」（堅固）と「本不生」、すなわち「アヌットウパーダ」を原語とする「ア」とがどういう意味でつながっているのか、「水大」（湿気・包摂）と「離言説」、すなわち「ヴァーチユ」（言説・言葉）を原語とする「ヴァ」とがどうつながっているのか、「火大」（熱・成熟）と「清浄無垢染」、すなわち「ラジャス」（塵・垢れ）を原語とする「ラ」とがどうつながっているのか、「火」と言えばサンスクリットでは通常「アグニ agni」であるが、「火大」がなぜ「清浄無垢染」なのか、「風大」（成長・拡大）と「因業」、すなわち「ヘートウ」を原語とする「カ」とがどうつながっているのか、「空大」（大気・天空・空中）と「等虚空」、すなわち「クハ」を原語とする「キャ」とがどういう意味でつながっているのか、「空」と言えばサンスクリットでは通常「アーカーシャ akāśa」であるが。

この「五大」の「種字」と「機能」の関係はよくわからない、明快な解釈があるとすれば、どなたかご教示をいただきたい。

【原文】

如是六大能造一切佛及一切衆生器界等四種法身三種世間。故大日尊說如來發生偈云

能生隨類形 諸法與法相 諸佛與聲聞 救世因緣覺 勤勇菩薩衆

及仁尊亦然 衆生器世界 次第而成立 生住等諸法 常恒如是生

此偈顯現何義。謂表六大能生四種法身曼荼羅及三種世間。謂諸法者心法。法相者色法。復次諸法舉通名。法相者顯差別。故下句云諸佛聲聞緣覺菩薩衆生器世間次第而成立。復次諸法者法曼荼羅。法相者三昧耶身。諸佛乃至衆生者大曼荼羅身。器世界者表所依土。此器界者三昧耶曼荼羅之總名也。復次佛菩薩二乘者表智正覺世間。衆生者衆生世間。器世界者即是器世間也。復次能生者六大也。隨類形者所生法也。即四種法身三種世間是也。故次又言。祕密主有造曼荼羅聖尊分位種子標幟。汝當諦聽吾今演說。即說偈曰

眞言者圓壇 先置於自體 自足而至臍 成大金剛輪

從此而至心 當思惟水輪 水輪上火輪 火輪上風輪

謂金剛輪者阿字。阿字即地。水火風如文而可知。圓壇者空。眞言者心大也。長行中所謂聖尊者大身。種子者法身。標幟者三昧耶身。羯磨身者三身各各具之。具說者經文廣說之臨文可知。

【書き下し】

是くの如き六大は、能く一切の佛と及び一切衆生と器界等と四種法身と三種世間とを造る。故に大日尊、如來發生の偈を説いて云わく、

能く、隨類形ずしるいぎようの諸法と法相と、諸佛と聲聞と、救世くせの因緣覺と、勤勇こんゆうの菩薩衆を生ず。

及びじんぞん仁尊もまた然り。衆生と器世界と 次第して成立す。生住しやうじゆう等の諸法も常恒に是くの如く生ず。

此の偈何の義をか顯現す。謂わく、六大は能く四種法身と曼荼羅と及び三種世間とを生ずることを表わす。謂わく、諸法とは心法なり、法相とは色しき法ぽうなり。復た次に、諸法とは通名を擧げ、法相とは差別しやさべつを顯わす。故に下の句に「諸佛・聲聞・縁覺・菩薩・衆生・器世間次第して成立す」と云う。復た次に、諸法とは法曼荼羅、法相とは三昧耶身なり。諸佛乃至衆生とは大曼荼羅身なり。器世界とは所依の土を表わす。此の器界とは三昧耶曼荼羅の總名なり。復た次に、佛・菩薩・二乗とは智ち正しやう覺かくは大曼荼羅身なり。器世界とは所依の土を表わす。此の器界とは三昧耶曼荼羅の總名なり。復た次に、佛・菩薩・二乗とは智正覺世間せけんを表わす。衆生とは衆生世間なり。器世界とは即ち是れ器世間きせけんなり。復た次に、能生とは六大なり。隨類形とは所生の法なり。即ち四種法身・三種世間は是れなり。故に次に又言わく。祕密主、曼荼羅しやうぞんの聖尊しやうぞんと分位と種子ひやうじきと標幟ひやうじきを造ることあり。汝、當に諦あきらかに聽きくべし、吾れ今演說せん。即ち説いて曰わく、

眞言者、圓壇えんだんを先ず自體に置け。 足へそより臍へそに至るまで大金剛輪だいこんごうりんと成し、

此れより心しんに至るまで當に水輪を思惟すべし。 水輪の上に火輪なり。 火輪の上に風輪なり。

謂わく、金剛輪とは阿字なり。阿字は即ち地なり。水と火と風は文の如く知る可し。圓壇とは空なり。眞言者は心大なり。長行ちやうぎやう

の中に謂う所の聖尊とは大身なり。種子とは法身なり。標幟とは三昧耶身なり。羯磨身とは三身に各々之を具す。具に説くとは經の文に廣く之を説けり、文に臨んで知る可し。

【私訳】

このように「六大」は、一切の仏と一切の衆生と人間をとりまく自然環境などと、四種の法身と三種の世間を造る（能生）。だから大日如来（「六大」）は、あらゆるものを出生させる偈を説いて言う、

よく、類形に随つて現れる事物・事象の属性とその形相や、諸仏と声聞や、世間救済の縁覚や、衆生済度につとめ励む菩薩たちを出生する。釈尊もまた同じく生んだ。衆生と器世界も順に出生し、生じとどまり変わり滅する諸法

も常にこのように出生する。

この偈は、どういう意味のことを言い表しているか。それを言えば、「六大」はよく四種法身と曼荼羅と三種世間とを生ずるということである。

それをまた言えば、事象事物の属性は精神現象である。その属性の形相は物的な事象である。

また次に、（別な見方では）諸法とは通例の名称を挙げ、法相とは個別の性格を言い表したものである（と言う）。だから、次の句で「諸佛・聲聞・縁覚・菩薩・衆生・器世間次第して成立す」と具体的に名を挙げたのである。

また次に、（四種曼荼羅の見方によれば）諸法とは法曼荼羅であり、法相とは三昧耶身であり、諸仏乃至衆生とは大曼荼羅身であり、器世界とはあらゆるものがよつて立つ国土という意味。この器界とは、三昧耶曼荼羅の總体的な名称である。

また次に、（三種世間の見方で言えば）佛・菩薩・二乗は智正覺世間を言い表わし、衆生は衆生世間を言い表し。器世界は器世間を言い表す。

また次に、能生すなわち造り出すものが「六大」で、隨類形が造り出される法である。つまり四種法身・三種世間である。故に、次にまた言うのだが、『大日經』「秘密漫陀羅品」に「秘密主、曼荼羅の聖尊と分位と種子と標幟を造ることあり。

汝、當に諦かに聽くべし、吾れ今演說せん」と言い、そこで説いて言うに、

真言行者は、「布字觀」を修し、先ず、円壇（空輪）を先ず自身（の頭頂）に布け。足から臍に至る下半身を大金剛輪と觀じ、臍から心臓の位置までを水輪と思惟し、その水輪の上に火輪を、火輪の上に風輪を觀ぜよと。

そこでまた言うに、金剛輪とは阿字のことである。阿字はすなわち「地大」である。「水大」「火大」「風大」は經文の通りに知るべし。円壇とは「空大」のことで、真言者は「心大」「識大」である。散文のなかに言う聖尊とは、大曼陀羅身である。種子は法身で、幟幟は三昧耶身である。羯磨身は大・三・法の三マンダラに各々具備されている。具さに説くというのは、經典の文に詳しく説いてあるということである。直接文にあたって理解すべし。

【註記】

①器界：器世界・器世間。国土・大地・山川・寒暖・日月・乾湿など、人間をとりまく自然環境。

②四種法身：自性身・受用身・變化身・等流身。

自性身は、真如・法界、すなわち華嚴で言う自然法爾の「事事無礙法界」を身体とし（法界体性）、その三密（身・口・意）は法界に満ち、自眷属とともに三密說法する仏身。宗祖大師の曰く「それ如来の說法は必ず文字による。文字の所在は六塵その体なり。六塵の体は法仏の三密すなわちこれなり」と。受用身は、自分のサトリを自ら享受して楽しむ（自受法樂）。「自受用身」（智法身）と、十地の菩薩のために說法する「他受用身」（理法身）とがある。變化身は、十地前の菩薩・緣覺・声聞・凡夫衆生のために応化身に変じて化導する仏身。等流身は、六道・九界において同じ姿となって救済する仏身。

③三種世間：ここでは器世間・衆生世間・智正覺世間。

器世間は①に同じ。衆生世間は、六道など、凡夫衆生が煩惱に染まりさまよっている世間。智正覺世間は仏・菩薩・緣覺・声聞の世間。

④隨類形・類形に随つて現れる種々の色身。四種法身・マンダラ・三種世間。

⑤勤勇・衆生濟度につとめ励む者、の意。

⑥仁尊・釈尊と解する説と、大日如来とする説と、菩薩とする説、また聖者とする説がある。私は、宗祖大師の別な著書の事例から「釈尊」と解釈した。

⑦生住等・生住異滅。生じ、とどまり、変り、消滅する、の「四相」。

⑧色法・精神現象の「心法」に対して物的な事物・事象のこと。

⑨圓壇・マンダラの意にとる先学が多いが、私は古例に準じて、円団の形をした頭頂のチャクラ（輪）の「空輪」と解した。

⑩大金剛輪・金剛輪は、四種の転法輪の「四輪」うちの一つ。東方阿閼如来の法輪。大金剛輪は、偉大な金剛輪の意（?）。

⑪心・心臓の位置。

【原文】

又曰。大日尊言。金剛手有諸如來意生作業喜戲行舞廣演品類。攝持四界安住心王等同虛空。成就廣大見非見果。出生一切聲聞辟支佛諸菩薩位。此文顯現何義。謂表六大能生一切。何以得知。謂心王者識大。攝持四界者四大。等虛空者空大。此六大能生。見非見者欲色界無色界。下如文。卽是所生法。如此經文皆以六大爲能生。以四法身三世間爲所生。此所生法上達法身下及六道。雖麤細有隔大小有差。然猶不出六大。故佛說六大爲法界體性。諸顯教中以四大等爲非情。密教則說此爲如來三摩耶身。四大等不離心大。心色雖異其性卽同。色卽心心卽色無障無礙。智卽境界卽智。智卽理理卽智無礙自在。雖有能所二生都絕能所。法爾道理有何造作。能所等名皆是密號。執常途淺略義不可作種種戲論。如是六大法界體性所成之身。無障無礙互相涉入相應。常住不變同住實際。故頌曰六大無礙常瑜伽。解曰。無礙者涉入自在義。常者不動不壞等義。瑜伽者翻云相應。相應涉入卽是卽身成佛義。

【書き下し】

又曰わく。「大日尊の言わく、金剛手、諸々の如來の意より生じて業戲ごっけの行舞ぎょうぶを作すこと有り。廣く品類ほんるいを演べたり。四界しようじを攝持しよくちし、心王しんのうを安住し、虚空に等同なり。廣大の見・非見の果を成就し、一切の聲聞・辟支佛びやくしぶつ・諸菩薩の位を出生す」と。

此の文は何の義を顯現する。謂わく、「六大」の能く一切を生ずることを表わす。

何を以つて知ることを得る。謂わく、心王とは「識大」なり。四界を攝持すとは「四大」なり。虚空に等しは「空大」なり。此の「六大」は能生なり。見・非見とは欲界・色界・無色界なり。下は文の如し。即ち是れ（六大）所生の法なり。

此の如く、經文は皆六大を以つて能生のうしんと爲し、四法身・三世間を以つて所生しよしんと爲す。此の所生の法は、上は法身に達し、

下は六道に及ぶまで、麤細そさい隔て有り、大小差しゃ有りと雖も、然して猶「六大」を出ず。故に佛は「六大」を説き法界體性ほっかいたいしんと

爲す。諸々の顯教の中に、四大等を以つて非情と爲す。密教は則ち此れを説いて如來の三摩耶身さんまやしんと爲す。四大等は「心大」

を離れず。心と色と異なると雖も、其の性は即ち同じなり。色は即ち心、心は即ち色、無障無礙むしようむげなり。智は即ち境、境は即

ち智、智は即ち理、理は即ち智、無礙自在なり。能所の二生有りと雖も都て能所を絶せり。法爾ほうにの道理にして、何の造作か

有らん。能所等の名は皆是れ密號みつごうなり。常途じょうずの淺略の義を執して種種の戲論を作す可からず。是くの如くの六大法界體性所

成の身は、無障無礙にして互相たがいに渉入し相應せり。常住不變にして同じく實際に住す。故に頌に曰わく、「六大無礙常瑜伽」と。解して曰わく、無礙とは渉入の自在なるの義なり。常とは不動不壞ふえ等の義なり。瑜伽とは翻じて相應と云う。相應渉入は即ち是れ即の義なり。

【私訳】

また、『大日経』「悉地出現品」に言う。「大日尊の言わく、金剛手、諸々の如来の意より生じて業戲ごっけの行舞ぎょうぶを作すこと有り。廣く品類を演べたり。四界を攝持し、心王を安住し、虚空に等同なり。廣大の見・非見の果を成就し、一切の聲聞・辟支佛・諸菩薩の位を出生す（大日如来が言うに、金剛手よ、諸々の如来の意密から生じた諸法が変現していろいろな姿・形をとり、廣く万象を存在あらしめている。「地大」「水大」「火大」「風大」の「四界」を包摂して持し、そこに「識大」の「心王」を安住させ、（廣大無辺の）虚空（「空大」）に等しい。見える世界（欲界・色界）と見えない世界（無色界）の広大な仏果を成就し、一切の聲聞・辟支佛、諸菩薩の果位を出生している」と。

この文はどのような意味を表わしているのか。
それを言えば、「六大」はよく一切を生ずる、ということである。

どうしてそれを知ることができるのか。
それを言えば、「心王」とは「識大」の意味であり、「四界」を攝持すは「四大」のことであり、「虚空に等し」は「空大」のことである。この「六大」は能生である。「見・非見」とは「欲界・色界・無色界」である。以下は経文の通りで、すなわ

ち、「六大」所生の法である。

このように、経疏はみな「六大」を「能生」とし、四法身・三世間を「所生」とする。この「所生」の法は、上は法身に達し、下は六道に及ぶまで、おおまかと微細、すなわち顕と密の別があり、大小の差があるけれども、いずれもが「六大」を出ない。故に、仏は「六大」を説いて、あらゆるものが無自性・空で、互いに相即相入して融通無礙の眞実の世界（法界）をその本体とする法界体性としている。諸々の顯教では「四大」等を命なきものとし、密教では如来の象徴としての命ある三摩耶身とする。（顕教では命なき）「四大」等は（密教では）「心大」（「識大」と同じ）（法界宇宙に遍満する精神現象）である。心法（精神現象）と色法（物的な物・事象）は異なるものと思われているが、その本性は同じである（色心不二）。色は即心、心は即色で、互いに妨げがない。智（直観智）は即境（直観の対象）、境は即智、智（直観智）は即理（直観された真理）、理は即智で、相互に渉入し合っている。「能（生）」「所（生）」の二生があるが、すべて能所（主客）の別なく一体である。（これは）そうあるべくしてそうある自然法爾（眞如・法如）の道理であり、何の作為でもない。能所といった名称はみな密教の言い方である。通常世間の浅い理解の説に固執してさまざま空疎な論を言ってはならない。このような「六大」という法界体性が生み出すさまざまな本体は、妨げなく互いに相即相入して離れない（瑜伽）。常住不変であり同じく眞実の境にとどまっている。

なので偈頌に「六大無礙にして常に瑜伽なり」と言ったのである。解釈して言うと、「無礙」とは、あらゆるものが妨げなく関わり合って互いに相即相入していること。「常」とは、いつでもどこでも、不変不動・堅固不壞に、ということ。「瑜伽」は、サンスクリット原語の「yoga」を漢訳して「相應」、あらゆるものがつながり合って離れないこと（例えば、色心相應）。この相應渉入のことを「即」というのである。

【註記】

①業戲の行舞…如来の意密から生じる諸法が変現していろいろな姿・形をとること。

- ② 如来の身・口・意の三業の
- ③ 品類・有情（命あるもの、人間・動植物）と非情（命なきもの、）などの万象。
- ④ 見・非見・見える世界と見えない世界。欲界・色界と無色界。
- ⑤ 四界・地・水・火・風。
- ⑥ 心王・ここは「識大」。
- ⑦ 辟支佛・縁覚。
- ⑧ 欲界・色界・無色界・三界。
- ⑨ 能生・六大能生。「六大」が生み出すこと。
- ⑩ 所生・六大所生。「六大」が生み出したもの。
- ⑪ 法界體性・あらゆるものが無自性・空で、互いに相即相入して融通無礙の眞実の世界（法界）をその本体とすること。
- ⑫ 三摩耶身・如来の象徴物。
- ⑬ 心と色・心法と色法。精神現象と物的な事物・事象。
- ⑭ 無障無礙・障礙、すなわち障害となるもの。
- ⑮ 常途・通常・一般。
- ⑯ 實際・眞実の辺際。

■四種曼荼各不離

【原文】

四種曼荼各不離者。大日經說。一切如来有三種祕密身。謂字印形像。字者法曼荼羅。印謂種種標幟卽三昧耶曼荼羅。形者相好具足身卽大曼荼羅。此三種身各具威儀事業。是名羯磨曼荼羅。是名四種曼荼羅。若依金剛頂經說。四種曼荼羅者。一大曼

荼羅。謂一一佛菩薩相好身。又綵畫其形像名大曼荼羅。又以五相成本尊瑜伽。又名大智印。一三昧耶曼荼羅。即所持幟幟刀劍輪寶金剛蓮等類是也。若畫其像亦是也。又以二手和合金剛縛發生成印是。亦名三昧耶智印。三法曼荼羅。本尊種子眞言。若其種子字各書本位是。又法身三摩地及一切契經文義等皆是。亦名法智印。四羯磨曼荼羅即諸佛菩薩等種種威儀事業等。若鑄若埋等亦是。亦名羯磨智印。如是四種曼荼羅四種智印其數無量。一一量同虛空。彼不離此此不離彼。猶如空光無礙不逆。故云四種曼荼羅各不離。不離即是即義

【書き下し】

「四種曼荼羅各々離れず」とは、『大日經』（「說本尊三昧品」）に説かく。「一切の如來に三種の祕密身有り。謂わく、字・印・

形像なり」。字とは法曼荼羅、印と謂うは種種の幟幟、即ち三昧耶曼荼羅、形とは相好具足の身、即ち大曼荼羅なり。此の三

種身に各々威儀事業を具す。是れを羯磨曼荼羅と名づく。是れを四種曼荼羅と名づく。

若し『金剛頂經』に依つて説けば、四種曼荼羅とは、一に大曼荼羅。謂わく一一の佛・菩薩の相好身なり、また其の形像を

綵畫するを大曼荼羅と名づく。また五相を以つて本尊の瑜伽を成ず。また大智印と名づく。二に三昧耶曼荼羅。即ち所持の

幟幟、刀劍・輪寶・金剛・蓮等の類、是れなり。若し其の像を畫する、また是れなり。また二手を以つて和合し金剛縛を發

生し印を成ず、是れなり。また三昧耶智印と名づく。三に法曼荼羅。本尊の種子眞言なり。若し其の種子の字を各々本位に

書く、是れなり。また法身の三摩地、及び一切の契經かいぎょうの文義等、皆是れなり。また法智印ほうちいんと名づく。四に羯磨曼荼羅。即ち諸佛・菩薩等の種種の威儀事業等なり。若しは鑄ちゆう、若しは捏等ねつ、または是れなり。また羯磨智印と名づく。是くの如く、四種曼荼羅、四種智印ししゅちいんは其の數無量なり。一一の量虚空に同じ。彼は此れを離れず、此れは彼を離れず。猶、空光の無礙にして逆らわざるが如し。故に「四種曼荼羅各不離」と云う。不離は即ち是れ「即」の義なり。

【私訳】

「四種曼荼羅各離れず」は、『大日經』「說本尊三昧品」に説かれている。すなわち、「一切の如來に三種の祕密身有り。謂わく、字・印・形像なり（すべての如來には三種類の祕密の形態がある、字と印と形像である）」と。字は法曼荼羅、印は（仏尊の）種々の象徴（しるし）で、三昧耶曼荼羅、形は仏尊の特徴を画き表わした絵図、すなわち大曼荼羅であり、この三種形態にそれぞれ仏尊の動作や活動が具有されている。これを羯磨曼荼羅と言ふ。以上が四種曼荼羅である。あるいはまた、『金剛頂經』（系の『理趣釈』）によれば、四種曼荼羅とは、一つには大曼荼羅で、一体一体の仏や菩薩のそれぞれ特徴ある仏身のこと、またその形像を絵図にしたものを大曼荼羅と言ふ。また、「五相成身觀」によつて成就した瑜伽觀法の本尊のことでもある。また成就した瑜伽觀法の内証を表象する印を大智印と言ふ。二つには三昧耶曼荼羅。すなわち仏尊が持つ仏尊の象徴の、刀劍・輪宝・金剛杵・蓮華などがそれである。またその姿・形を絵にしたものもそうである。また、二手を外縛して金剛縛の印を結ぶのもそうである。それをまた三昧耶智印と名づく。三つには法曼荼羅。本尊の種子、すなわち一字真言（梵字）である。またその種子の梵字をマンダラの各々あるべき所に書くこともそれである。また法身のサトリの境地、及び（それを書いた）あらゆる仏典の文や素も意味など、これも皆そうである。それを法智印と言ふ。四つ

には羯磨曼荼羅。諸仏・菩薩などの種々の動作や活動などである。あるいは鑄造、あるいは塑造などで作られた尊像もそれである。それを羯磨智印と言う。このように、四種曼荼羅・四種智印は、その数は無量であり、一つ一つの分量は虚空に同じく果てしない。彼はこれを離れず、これは彼を離れず。まるで空と光とが互いに相入し合って妨げないのと同じである。なので「四種曼荼羅各不離」と言ったのである。不離とは「即」の意味である。

【註記】

- ①法曼荼羅…仏尊をその仏尊を意味する種字（梵字）で書き表わしたマンダラ。
- ②三昧耶曼荼羅…仏尊をその象徴である印や所持物で書き表わしたマンダラ。
- ③相好具足…仏身の特徴を有していること。
- ④大曼荼羅…仏尊そのものの姿を絵図で書き表わしたマンダラ。
- ⑤威儀事業…仏尊の動作や活動。
- ⑥羯磨曼荼羅…仏尊を鑄造・塑造・木造などで表わしたマンダラ。
- ⑦五相…五相成身觀。通達菩提心・修菩提心・成菩提心・証金剛身・仏身圓滿。
- ⑧大智印…大マンダラの仏尊の内証を表象する印。
- ⑨金剛縛…金剛合掌して外縛。
- ⑩三昧耶智印…三昧耶マンダラの仏尊の内証を表象する印。
- ⑪本位…仏尊のマンダラにおけるあるべき場所。
- ⑫法智印…法マンダラの仏尊の内証を表象する印。
- ⑬四種智印…大智印・三昧耶智印・法智印・羯磨智印。

■三密加持速疾顯

【原文】

三密加持速疾顯者。謂三密者一身密二語密三心密。法佛三密甚深微細等覺十地不能見聞故曰密。一一尊等具剎塵三密。互相加入彼此攝持。衆生三密亦復如是。故名三密加持。若有眞言行人觀察此義。手作印契口誦眞言心住三摩地。三密相應加持故早得大悉地。故經云。此毘盧遮那三字密言共一字無量。適以印密言印心成鏡智速獲菩提心金剛堅固體。印額應當知成平等性智速獲灌頂地福聚莊嚴身。以密語印喉時成妙觀察智即能轉法輪得佛智慧身。誦密言印頂成成所作智證佛變化身能伏難調者。由此印密言加持自身成法界體性智毘盧遮那佛虛空法界身。又云。入法身眞如觀一緣一相等猶如虛空。若能專注無間修習。則入初地頓集一大阿僧祇劫福智資糧。由衆多如來所加持故。乃至十地等覺妙覺具薩般若。自他平等與一切如來法身共同。常以無緣大悲利樂無邊有情作大佛事自此下

儀軌之又云。若依毘盧遮那佛自受用身所說內證自覺聖智法。及大普賢金剛薩埵他受用身智。則於現生遇逢曼荼羅阿闍梨得入曼荼羅。爲具足羯磨以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中猶加持威德力故。於須臾頃當證無量三昧耶無量陀羅尼門。以不思議法能變易弟子俱生我執種子。應時集得身中一大阿僧祇劫所集福德智慧。則爲生在佛家。其人從一切如來心生。從佛口生從佛法生從法化生得佛法財。法財者謂三密菩提心教法此明初授菩提心戒時阿闍梨加持方便所得之益纔見曼荼羅能須臾淨信。以歡喜心瞻觀故。則於阿賴耶識中種金剛界種子此文明初見曼荼羅海會諸尊所得益具受灌頂受職金剛名號。從此已後受得廣大甚深不思議法超越二乘十地。此大金剛薩埵五密瑜伽法門。於四時行住坐臥四威儀之中無間作意修習。於見聞覺知境界人法二空執悉皆平等。現生證得初地漸次昇進。由修五密於涅槃生死不染不著。於無邊五趣生死廣作利樂。分身百億遊諸趣中。成就有情令證金剛薩埵位此明依儀軌法則修行之時不思議法益又云。三密金剛以爲增上緣能證毘盧遮那三身果位。如是經等皆說此速疾力不思議神通三摩地法。若有人不闕法則晝夜精進。現身獲得五神通。漸次修練不捨此身進入佛位。具如經說。依此義故曰三密加持速疾顯。加持者表如來大悲與衆生信心。佛日之影現衆生心水曰加。行者心水能感佛日名持。行者若能觀念此理趣。三密相應故現身速疾顯現證得本有三身。故名速疾顯。如常即時即日即身義亦如是

【書き下し】

「三密加持して速疾に顯わる」とは、謂わく、三密とは、一つには身密、二つには語密、三つには心密なり。法佛の三密は甚深微細にして等覺・十地も見聞すること能わざるが故に密と曰う。一一の尊に等しく刹塵の三密を具し。互相に加入し、彼れ此れ攝持す。衆生の三密はまた是くの如し。故に三密加持と名づく。若し、眞言行人有つて、此の義を觀察し、手に印契を作り、口に眞言を誦し、心は三摩地に住すれば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得。

故に經（『金輪時処軌』）に云わく、「此の毘盧遮那仏の三字の密言は、共に一字にして無量なり。適に印と密言を以つて心を

印すれば、鏡智を成じて速やかに菩提心の金剛堅固の體を得。額を印して、應當に知るべし、平等性智を成じて速やか

に灌頂地の福聚莊嚴の身を獲。密語を以つて喉を印する時、妙觀察智を成じて即ち能く法輪を轉じ佛の智慧身を得。密言

を誦じて頂を印すれば、成所作智を成じて佛の變化身を證し、能く難調の者を伏す。此の印と密言に由つて自身を加持す

れば、法界體性智、毘盧遮那佛虚空法界の身を成ず」と。

又、『觀智儀軌』に云わく。「法身眞如觀に入つて一縁一相の平等なること猶虚空の如し。若し能く專注にして無間に修習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集む。衆多の如來の加持する所に由るが故に、乃至、

十地・等覺・妙覺に至るまで薩般若を具し、自他平等にして一切如來の法身と共に、同じく常に無縁の大悲を以つて無邊の有情を利樂し、大佛事を作す」と。

又、(同『五秘密軌』)云わく。「若し毘盧遮那佛自受用身所説の内證自覺聖智の法、及び大普賢金剛薩埵の他受用身の智に依らば、則ち現生に於いて曼荼羅阿闍梨に遇逢し、曼荼羅に入ることを得。爲、羯磨を具足し、普賢三摩地を以つて金剛薩

埵を引入し、其の身中に入る。加持の威徳力に籍るが故に、須臾の頃に於いて當に無量の三昧耶、無量の陀羅尼門を證すべ

し。不思議の法を以つて能く弟子の俱生の我執の種子を變易し、時に應じて身中に一大阿僧祇劫の所集の福德と智慧を集得し、則ち佛家に生在すると爲す。其の人、一切如來の心従り生じ、佛の口従り生じ、佛法従り生じ、法化従り生じて、佛の法財を得。法財とは、謂わく、三密の菩提心の教法なり」と。(此れ、初めて菩提心戒を授かる時、阿闍梨の加持方便により、

得る所の益を明かす)。「纔に曼荼羅を見るに能く須臾の頃に淨信す。以歡喜心を以つて瞻觀するが故に。則ち阿頼耶識の中

に於いて金剛界の種子を種う」と。(此の文は初めて曼荼羅海會の諸尊を見て得る所の益を明かす)。「具に灌頂受職の

金剛名號を受く。此れ従り已後、廣大甚深不思議の法を受得し、二乘・十地を超越す。此の大金剛薩埵の五密瑜伽の法門を

四時に於いて、行住坐臥しうぎの四威儀の中に、無間むけんに作意さいして修習しゅうじゆすれば、見聞けんもん・覺知かくちの境界きやうかいに於いて、人法にんぽう・二空にくうの執、悉く皆平等にして、現生に初地を證得し、漸次ぜんじに昇進す。五密を修するに由つて、涅槃と生死に於いて染せず著せず、無邊の五趣の生死に於いて廣く利樂を作し、身を百億に分ち、諸趣の中に遊んで、有情を成就し、金剛薩埵の位を證せしむ」と。(此れ儀軌法則の依つて修行の時の不思議の法益を明かす。)

又、云わく、「三密金剛を以つて増上縁と爲し、能く毘盧遮那の三身の果位を證す」と。是くの如くの經等は、皆、此の速疾力そくしつりきの不思議神通の三摩地法を説く。若し、人有つて、法則を闕かさずして晝夜に精進すれば、現身こじんつうに五神通を獲得す。漸次に修練すれば此の身を捨てずして進んで佛位に入る。具に經に説くが如し。此の義に依るが故に、「三密加持速疾顯」と曰う。加持とは、如來の大悲と衆生の信心を表わす。佛日の影、衆生の心水に現ざるを「加」と曰い、行者の心水、能く佛日を感じるを「持」と名づく。行者若し能く此の理趣を觀念すれば、三密相應するが故に現身ほんぬに速疾に顯現し本有ほんぬの三身を證得す。故に「速疾顯」と名づく。常の即時・即日の如く「即身」の義もまた是くの如し。

【私訳】

「三密加持して速疾に顯わる」というのは、(先ず)「三密」とは、一つに身(秘)密、二つに語(秘)密、三つに心(秘)密である。法身の「三密」は深細で「十地」の上の五十二位や「十地」の菩薩でも見聞することなどできないから、(秘)密というのである。一尊一尊に等しく無数の「三密」が具有され、(それが)お互いに渉入し合い、それぞれを保持している。

「衆生」の「三密」もまた同様である。その故に「三密加持」と言うのである。もし、真言行者が、このことをよく心得て、手に印を結び、口に真言を誦し、心は本尊と一体の一点集中の境地に入れば、(行者と本尊の)「三密」は相応じて加持感応するから、速やかに大いなる成仏の境地に到ることができるのである。

だから、『金輪時処軌』に次のように言っている。「この毘盧遮那仏(大日如来)の「オン ボクケン Om bōhū kham」という三字の密言(真言)は、それぞれ一字に無量の意味を含んでいる。まさに(行者が)印を結び、密言(真言)を誦し、心(胸)に一点集中して加持すれば、大円鏡智を得て、速やかに菩提心の金剛堅固な(阿闍如来の)仏身となるのである。(次に)額に一点集中して加持すれば、平等性智を得て、速やかに灌頂受法の境地にて、福聚(法悦)で荘嚴された(宝生如来の)仏身となることをまさに知るべし。(また)密語(真言)を誦して喉に一点集中すれば、妙觀察智を得てよく法輪を転じ(説法を行い)、如来の仏智を具備した(阿弥陀如来の)仏身となる。(さらには)密言(真言)を誦して頭頂に一点集中すれば、成所作智を得て、如来の変化身(不空成就如来)となり、仏道に帰依しない者をよく化導する。この印と密言で自身を加持すれば、法界体性智(を得て)、毘盧遮那仏の虚空法界の仏身となる」と。

また、『観智儀軌』に言うに、「法身の真如を観じる観行に入ると、(あらゆるものが)行者とのかかわりやその形相が平等無差別であり、まるで虚空があらゆるものを包含しているかのようである。もしよく集中して間断なくこれを修習すれば、現在の生において菩薩の初地に入り、永遠に近い無時間的な時間を要する福(檀波羅蜜・戒・忍・進・禅波羅蜜)と智(智波羅蜜)というサトリの原材を速やかに集める。あまたの如来によって加持されるため、(菩薩の五十位までの)「十地」・(五十一位の)等覺そして(五十二位の)妙覺に至るまで、一切智を具有し、自他平等の境地で、一切如来の法身と等同となり、同じく常に無限の大慈悲を以って限らない衆生を済度し、大いなる仏の事業を成就することができる」と。

また、『五秘密軌』に言うに、「もし、毘盧遮那佛(大日如来)が、自受法樂のために自らに説法する仏身(自受用身)として説く自内証の真実智の教えと、偉大な普賢心(菩提心)持つ金剛薩埵の、衆生済度のために説法する仏身(他受用身)の教えによれば、現在の生において(行者を)曼荼羅(壇)に導き入れる(灌頂)阿闍梨に遇い、曼荼羅に入ることができ

る。(この時、(灌頂の)阿闍梨は)羯磨(三昧耶戒の戒壇において行う授戒の作法のうちの第八、三聚戒・四重戒・十無尽戒の所作)を身に具え、(金剛薩埵の)堅固な菩提心の境地に入り、金剛薩埵を引き入れて行者の身体に入らしめる(行者を金剛薩埵と観想する)。(阿闍梨の)加持の威神力によって、少しの間に無量の行者と本尊とが一体になる観法や、無量の真言・陀羅尼を誦持する一点集中の修習を成就すべし。(また阿闍梨は)不思議は法術でよく弟子が生来持っている自我への執著の種を変質させ、永遠に近い無時間的な時間を要して積集する福德(檀波羅蜜・戒・忍・進・禪波羅蜜)と智慧(智波羅蜜)を、時に応じて、身体の中に集積し、(我執に染まる弟子を)仏道修行者に変えて生き在らしめることができる。その人は、心は一切如来の心(心密)から生じ、コトバは如来の口から生じ、身体は如来の法体から生じ、所作・活動は如来の説法から生じて、如来の教法を会得する。教法(法財)とは、「三密」を具する菩提心の教法である」と。(これは、初めて菩提心戒(仏性三昧耶戒)を授かる時、(灌頂)阿闍梨の加持方便によって、得られる利益を明かしたのである)。

「纒に(灌頂の受者が灌頂道場に入って覆面をとられ)曼荼羅壇をわずかに見ただけで、すぐに淨らかな信心が起きる。以歡喜の心で仰ぎ見るから、阿頼耶識の中に金剛界(五秘密曼荼羅)の種が宿っているのである」と。(この『五秘密軌』文は初めて曼荼羅海會の諸尊を見て得る利益を明かしたのである)

「具に(受者は)灌頂を受法した証しとなる金剛の名号を受ける。それからあとは、廣大無辺にして意味深く不思議な三摩地法を受法し、声聞・縁覚(二乗)や「十地」の菩薩を超越する。この大いなる金剛薩埵(と明妃)の五秘密瑜伽の三摩地法の修習を後夜・日中・初夜・夜半の四時に、行・住・坐・臥のふるまいの中で、間断なく留意して修習すれば、見聞し覚知する世間日常において、人空・法空の二空への執著、ことごとく無差別平等であり、現在の生において(菩薩の十地の)初地を成就し、次々と菩薩位を昇進する。この五秘密の瑜伽を修することによって、涅槃にも生死にも染まらず執著せず、はてしない地獄・餓鬼・畜生・人間・天の五惡趣の生死において広く衆生済度を実戦し、自身を百億に分けて、五惡趣の中に遊んで、衆生を仏道に化導し、金剛薩埵の位を成就させる」と。(これは、『御秘密軌』の法則に従って修行する時の不思議な法益を明かしたのである)。

また、『五秘密軌』に「身・口・意の「三密」行という堅固な行が増々上向きの縁となり、毘盧遮那（大日如来）の自性・受用・変化の三身のサトリの境地を成就する」と。

このような経典・儀軌類はみな、この速疾に成仏する不思議な神通の三摩地法を説く。もし誰か、法則を従つ昼夜に精進して修習すれば、現生の身に神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通の五神通を得る。次々と修練すれば、この身を捨てずして進んで仏の心位に入る。詳しくは経典・儀軌に説かれている通りである。この意味によるから、「三密加持速疾顯」というのである。加持とは、如来の大悲と衆生の信心を表わす。仏の日光の影が、衆生の心の水面に現れるのを「加」と言い、行者の心の水面が、よく仏の日光に感応するのを「持」と名づく。行者がもし、よくこの道理を心に留めれば、「三密」は相應するから、現在の身に速疾に本有の自性・受用・変化の三身が顯現する。その故に「速疾顯」と言うのである。常に言う即時・即日と同じく、「即身」の意味もまたその通りである。

【註記】

①三字の密言：「オン ボクケン（オン ボツケン）Om bhuḥ Khan」

②鏡智：大円鏡智。阿閼如来の三摩地。大きな丸い鏡に万物が映るように、この智慧に無自性・空の真実が映し出される。

③平等性：宝生如来の三摩地智。一切の諸法が無自性・空の真実において等しいと見る智慧。

④妙觀察智：阿弥陀如来の三摩地。一切の諸法・凡夫衆生を無自性・空の立場からよく観察する智慧。

⑤成所作智：不空成就如来の三摩地。衆生済度の実践の智慧。

⑥難調：仏道に帰依しない者。

⑦法界体性智：大日如来の三摩地。法界のあらゆるものがさながらに相即相入し合つて法爾自然であるという智慧。

⑧一縁一相：行者とのかかわりやその形相。

⑨初地：菩薩の「十地」の最初の位。歡喜地。

- ⑩ 一大阿僧祇劫…一劫。永遠に近い無時間的な時間。
- ⑪ 資糧…サトリのための物質的精神的な原材料。
- ⑫ 自受用身…自らのサトリを自受法楽のために説く仏身。
- ⑬ 内證自覺聖智…自らのサトリの智。自内証。
- ⑭ 他受用身…衆生済度のために説法する仏身。
- ⑮ 羯磨…三昧耶戒の戒壇において行う授戒の作法のうちの第八、三聚戒・四重戒・十無尽戒の所作。
- ⑯ 普賢三摩地…金剛薩埵の堅固な菩提心の境地。
- ⑰ 須臾の頃…少しの間。
- ⑱ 俱生…生まれながら、生来。
- ⑲ 變易…変える。変質させる。
- ⑳ 淨信…清らかな信心。
- ㉑ 瞻觀…仰ぎ見ること。
- ㉒ 曼荼羅海會…マンドラに諸尊が集合している図。
- ㉓ 灌頂受職の金剛名號…灌頂を受法した証しとなる金剛の名号。
- ㉔ 五密瑜伽…淨菩提心を具有する金剛薩埵と人間の欲望の欲・触・愛・慢が淨化された四金剛菩薩（妃菩薩）を本尊とする、
煩惱即菩提・即事而眞の觀法。
- ㉕ 人法二空…人（主觀、五蘊皆空）と事物・事象（客觀、諸法皆空）
- ㉖ 速疾力…成仏が速い能力。
- ㉗ 現身…現在の生身。この身。
- ㉘ 五神通…神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通。

②9 三密相應…行者の身・口・意と本尊の身・口・意とが一体になること。

【付記】

【註記】にも書いた「羯磨（こんま）」である。私が伝法灌頂の大阿を勤めた際に修した「三昧耶戒大阿作法」に次のようにある。

大阿、三昧耶戒道場の高座に上り、「振鈴」まで作法を行う。そこで教授阿闍梨が受者を道場に引入し、受者は着座して諸々の所作を行う。次いで大阿が「表白」を読んで今から「（仏性）三昧耶戒」を授ける旨を告げるなかで、「佛子、心を至して羯磨を聽くべし。但し、佛性戒を授くるに略して八の門あり」と言い、その第八に羯磨が説かれる。すなわち、

第八羯磨

今正しく得戒の時に至る、佛子心を至して「羯磨」を聽くべし。

若し佛性三昧耶戒を受けんと欲わば、先ず無上の心を發すべし、

其の無上の心とは、五篇（ごひん）、七聚、三聚、四重、十無盡戒を持するなり。

其の三聚戒とは攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり。

五篇七聚とは具足戒なり、是等の戒は登壇得戒の時皆持つまくののみ。

四重戒とは

一には、正法を捨て邪行を起こす、是第一の波羅夷なり。

犯すべからず、能く持つべしや否や。

答（受者）、能く持つ。

二には、菩提心を捨離する、是第二の波羅夷なり。

犯すべからず、能く持つべしや否や。

答（受者）、能く持つ。

三には、一切に於て恚慳（りんげん）する、是第三の波羅夷なり。

犯すべからず、能く持つべしや否や。

答（受者）、能く持つ。

四には、一切衆生に於て、不饒益の行を作す、是第四の波羅夷なり。

犯すべからず、能く持つべしや否や。

答（受者）、能く持つ。

十無盡戒とは

一には、菩提心を退すべからず、成佛を妨ぐが故。

二には、三寶を捨離し、外道に歸依すべからず、是れ邪法なるが故に。

三には、三寶及び三乗の法を毀謗すべからず、佛性に背くが故。

四には、甚深の大乗經典の通解せざる處に於て疑惑を生（な）すべからず、凡夫の境に非ざるが故。

五には、若し衆生あつて、已に菩提心を發する者を、和悦歎美すべし、三寶の種を繼ぐが故。

六には、未だ菩提心を發さざる者を、勸誘し引攝すべし、大願あるが故。

七には、小乗の人及び邪見の人に對して、深妙の大乗を説くべからず、彼誹謗を生（な）して大殃（だいおう）を獲

いんだらしゅもう

因陀羅珠網なり。謂わく、身とは我身・佛身・衆生身、是れを身と名づく。又、四種の身有り。言わく、自性・受用・變化・等流、是れを名づけて身と曰う。又、三種有り、字・印・形、是れなり。是くの如く等の身は縦横にして重重なること鏡中の影像と燈光と渉入するが如し。彼の身は即ち是れ此の身、此の身は即ち是れ彼の身、佛身は即ち是れ衆生身、衆生身は即ち是れ佛身、同じからずして同じ、異ならずして異なり。故に「三等無礙の眞言に曰わく、歸命の句は常の如し。」「**समस्य**」法・僧、是れ三なり。身・語、意も、また三なり。心・佛及び衆生、三なり。是くの如くの三法は平等平等にして一なり。一にして無量、無量にして一なり。終に雜亂せず。故に「重重帝網名即身」と曰う。

【私訳】

「重重帝網なるを即身と名づく」というのは、(法界の)諸尊の無数の身・口・意の「三密」が相互に相即相入して無礙なることを譬喩を用いて言ったのである。帝網とは、ヒンドウの武勇神インドラ天が発する稲妻の光網に喩えられた、帝釈天の宮殿の寶石のかざり網のことである。(「即身」の)身とは、わが身・仏身・衆生身であり、また、四種の身があり、自性身・受用身・變化身・等流身で、是れも身と曰う。また、三種の身があり、字(梵字)で画かれたもの・印(印契や持物などの象徴物)で画かれたもの・鑄造・塑造・木造などの形像も、身である。このような身は縦横にして多重多層、まるで鏡の中の影像と灯火の光とが映し合い渉入しているようである。かの身はすなわちこの身、この身はすなわちこの身、仏身はすなわち衆生身、衆生身はすなわち仏身。同じくはないが同じであり、異なっていないが異なっている。それ故、三等無礙の「入仏三昧耶眞言」(『大日経』「密印品」)に曰う。歸命の句、すなわち「ノウマク 曩莫 Namah」。「サマンダボダナン 三曼多没駄南 samanta-buddhanān」は常の如し。「**समस्य**」阿三迷底哩三迷三昧曳莎呵、アサンメイチリサ

ンメイサンマエイソワカ *asame trisame sanmaye svata*」。最初の「アサンメイ」は「無等」という意味。次の「チリサンメイ」は「三等」という意味。最後の「サンマエイ」は「三平等」という意味である。仏・法・僧は三、身・語。意も三、心・佛及び衆生も三である。以上の三法は平等平等で本来は一である。一にして無量（一即多）、無量にして一（多即一）である。つまりこの三は入り乱れることがない。以上のような次第で「重重帝網名即身」と言うのである。

【註記】

①因陀羅珠網・因陀羅はヒンドウの武勇神インドラ天。珠は帝釈天の宮殿のかざり網にちりばめられた宝石。網はインドラ天が発する稲妻に喩えられた帝釈天の宮殿のかざり網。すなわち、ヒンドウの武勇神インドラ天が発する稲妻の光網に喩えられた、帝釈天の宮殿の宝石のかざり網。

②二等無礙の眞言：『大日経』「具縁品」に説く入仏三昧耶眞言。サンスクリットで「*Namah samanta-buddhanam asame trisame sanmaye svata*」。漢訳は「曩莫三曼多没駄南阿三迷底哩三迷三昧曳莎呵」。私訳で「胎藏マンタラの」遍き諸尊に稽首礼します。比肩するものなく（無等）、（我身・仏身・衆生身など）三平等の（三平等）、三昧耶（仏と行者の三密一如）に、幸いあれ」。また、『大日経』「密印品」にも「一切如来入三昧耶遍一切無能障礙力無等三昧力明妃」とある。

■法然具足薩般若く円鏡力故実覺智

【原文】

法然具足薩般若者。大日經云。我一切本初。號名世所依。說法無等比。本寂無有上。謂我者大日尊自稱。一切者舉無數。本初者本來法然證得如是大自在一切法之本祖。如來法身衆生本性。同得此本來寂靜之理。然衆生不覺不知。故佛說此理趣覺悟衆生。又云。諸樂欲因果者。非彼愚夫能知眞言之相何以故。說因非作者。彼果則不生。此因尙空云何而有果。當知眞言果。悉離於因果。上文所引我覺本不生乃至遠離於因緣偈。及諸法本不生乃至因業等虚空。如是等偈皆明法然具足之義。又金剛頂

云。自性所成眷屬金剛手等十八大菩薩。乃至各各流出五億俱胝微細法身金剛如是等文。亦是此義也。言法然者顯諸法自然如是。具足者成就義無闕少義。薩般若者梵語也。古云薩云者訛略。具云薩羅婆和孃曩。翻云一切智智。一切智智者。智者決斷簡擇義。一切佛各具五智二十七智乃至剎塵智。

次兩句卽表此義。若明決斷德則以智得名。顯集起則以心得稱。顯軌持則法門得稱。一一名號皆不離人。如此人數過剎塵。故名一切智智。不同顯家一智以對一切得此號。心王者法界體性智等。心數者多一識。各具五智明一心王心數各各有之。無際智高廣無數之義。

圓鏡力故實覺智者。此卽出所由。一切諸佛因何得覺智名。謂如一切色像悉現高臺明鏡之中。如來心鏡亦復如是。圓明心鏡高懸法界頂。寂照一切不倒不謬。如是圓鏡何佛不有。故曰圓鏡力故實覺智。

卽身成佛義

【書き下し】

「法然に薩般若を具足し」とは、『大日經』に云わく、「我、一切の本初ほんじよなり。號して世所依せしよえと名づく。說法、等比無く、本より寂にして上有ること無し」と。謂わく、我とは、大日尊の自稱なり。一切とは無數を擧ぐ。本初とは本來法然に是くの如くの大自在の一切法を證得するの本祖なり。如來の法身と衆生の本性は、同じく此の本來寂靜の理を得れども、然も衆生は覺せず知るもせず。故に佛、此の理趣を説いて衆生を覺悟せしめたり。

また云わく、「諸々の因果を樂欲する者、彼の愚夫ぐぶの能く眞言と眞言の相を知るに非ず。何を以つての故に。因は作者に非ずと説かば、彼の果は則ち不生なり。此の因、因すら尚し空なり。云何が果有らんや。當に知るべし、眞言の果、悉く因果を離れたり」と。上の文に引く所の「我覺本不生乃至遠離於因縁」の偈、及び「諸法本不生乃至因業等虚空」。是くの如き等の

偈は、皆「法然眞足」の義を明かす。

また、『金剛頂(經)』に云わく、「自性所成の眷屬の金剛手等の十六大菩薩。乃至。各各に五億俱胝の微細法身の金剛を流出す」と。是くの如き等の文はまた是れ此の義なり。「法然」と言うは、諸法の自然に是くの如くなるを顯わす。「具足」とは、成就の義にして無闕少の義なり。「薩般若」とは、梵語なり。古くに「薩云」と云うは訛略なり。具には「薩羅婆枳孃」さらばきじやのうと云う。翻じて「一切智智」と云う。一切智智、智とは決斷と簡擇の義なり。一切の佛、各々五智・三十七智乃至剎塵の智を具す。

次の兩句は即ち此の義を表わす。若し決斷の徳を明かすに則ち智を以つて名を得。集起を顯わすに則ち心を以つて稱を得。軌持を顯わすに則ち法門に稱を得。一一の名號、皆人を離れず。此くの如くの人、「數、剎塵に過ぎたり」。故に一切智智と名づく。顯家の一智以つて一切に對し、此の號を得るに同じからず。「心王」とは「法界體性智」等なり。「心數」とは多一識なり。「各々五智を具す」とは、一一の心王・心數に各各に之れ有るを明かす。「無際智」とは高廣にして無數の義なり。「圓鏡力の故に實覺智なり」とは、此れ即ち所由を出す。一切諸佛は何に因つて覺智の名を得んや。謂わく、一切の色像の悉く高臺の明鏡の中に現するが如く、如來の心鏡もまた是くの如し。圓明の心鏡、高く法界の頂きに懸り、寂にして一切を照らして不倒不謬なり。是くの如くの圓鏡、何の佛に有らざらん。故に「圓鏡力故實覺智」と曰う。

【私訳】

「法然に薩般若を具足す」というのは、『大日經』「転字輪漫荼羅行品」に次のように説かれている。「我（大日如来）はあらゆる一切のものの本源である。世間の抛り所と呼ばれている。説法はこの上なく、もとより寂靜の三摩地に住していて上に誰もいない」と。すなわち、「我」というのは、大日尊が自らを言ったのである。「一切」というのは、無数の意味。「本初」とは、本來法爾自然にして自在無礙なる一切諸法を覺っているその大本である。如來の法仏としての仏身と衆生の本性とは、等同であつて、この本來寂靜の（サトリの）道理を會得しているのだが、世間の衆生はそれを察知せず知ろうともしない。故に仏は、このサトリの道理を説いて衆生をサトリに導こうとしているのである。

また（『大日經』「悉地出現品」に）言うに、「因果によつて生々流転する（世間の）ものごとくに愛著する愚かな衆生は、（例えば）真言（の真意）と真言の（誦持などの）外面も知らない。なぜかと言うに、因はものごとこの起因ではないと（彼らが）主張するなら、結果は生じない。（しかし）この因すら空である。どうして結果が生じようか（果も空である）。まさに真言の果はみな因果を離れているのだ、と知らなければならぬ」と。上の文に引いた「我覺本不生」から「遠離於因縁」の偈と、及び「諸法本不生」から「因業等虚空」の偈は、みな「法然具足」の意味を明かしたものである。

また、『金剛頂（經）』（すなわち、『金剛頂經』系の『瑜祇經』）に説くに、「法爾自然を自性とする法身大日の脇侍の金剛手菩薩など十六大菩薩」さらに「各々に五億×一千万（あるいは五億×一億）の（十地の菩薩にも見えないほど）微細で金剛のように堅固な法身を流出する」と。以上の文もまた「法然具足」の意味である。

「法然」というのは、あらゆるものがそうなるべくしてそうなる法爾自然のことを表わしている。「具足」とは、成就の意味で欠けることがないという意味である。「薩般若」とは、サンスクリットで、古訳に「薩云」などと言うのはなままつて略されたものである。具体的には「薩羅婆枳孃曩（さらばきじやのう）、サルバ・ジュニヤーナ sarva-jñāna」と言い、漢訳して「一切智智」と言う。一切智智の「智」とは、決断と簡択（選択すること）の意味である。一切の仏はそれぞれ、五智と金剛界の三十七尊の智慧とその他無数の仏智を具えているからである。

その次の、「心数心王刹塵に過ぎたり」と「各々五智無際智を具す」の二句は、ともに「一切智智」の意味を明かしている。すなわち、決断の徳を明かにするのに「智」が用いられた。仏智を集めて起すのを顯わすのに「心」が用いられた。（仏智を）保持することを顯わすのに「法門」が用いられた。（一切智智の）一つ一つの名称はみな人を離れたものではない。その人は「数、刹塵に過ぎたり」である。その故に「一切智智」と言う。顯教の人たちが言うように、一つの智慧によってあらゆるものに対応できると言う意味で、これらの名称を得るのとは異なる。「心王」とは「法界体性智」等である。「心数」とは心王以外のその他の認識作用である。「各々五智を具す」とは、一つ一つの心王・心数にそれぞれ五智を有するという意味。「無際智」とは、高く広くして無数、すなわち無限の意味である。「圓鏡力の故に實覺智なり」とは、成仏の抛り所を言ったのである。一切諸仏は何によって「覺智」と言われるのか。すなわち、色やかたちもあるものがごとごとく高台の明るい鏡に映し出されるように、如來の心の鏡もそれと同じである。丸く汚れない心の鏡は、高く法界の頂きにかかって、寂靜にして一切を照らし、（逆さまに映す）顛倒もなく（まちがったものを映す）誤りもない。このような円鏡、いかなる仏にないだろう。だから「圓鏡力故實覺智」と言うのである。

【註記】

- ①世所依…世間の抛り所。
- ②愚夫…愚かな衆生・外道。
- ③自性所成…簡単に解釈できない宗祖の造語で、先学に「金剛界の智法身大日」とする説がある。その場合「自性」とは「法爾」すなわち「法然具足」とする（松長有慶『訳注 即身成仏義』）。
- ④眷屬…脇侍・侍者・従者。
- ⑤金剛手…金剛薩埵。
- ⑥十六大菩薩…金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜（東方）、金剛宝・金剛光・金剛幢・金剛笑（南方）、金剛法・金剛利・

金剛因・金剛語（西方）、金剛業・金剛護・金剛牙・金剛拳（北方）。

金剛界の四仏、阿閼如来（東方）・宝生如来（南方）・阿弥陀如来（西方）・不空成就如来（北方）の眷属。

⑦俱胝…一千万あるいは一億。十の七乗。

⑧微細…十地の菩薩も見えないほどの細かさ。この上ないほどの、といった意。

⑨無闕少…欠けることがないこと。

⑩訛略…なまたって略すころ。

⑪薩羅婆枳孃曩…「サルバ・ジュニヤーナ sarvajñāna」。一切智智。

⑫二十七智…金剛界二十七尊の智慧。

⑬集起…諸縁が集って起る・原因。

⑭軌持…軌範を保持すること。

⑮多一識…多と一を相対的に見て、絶対矛盾的自己同一で見ない認識。心王以外の識。『釈摩訶衍論』で言う「十識」のうち
の第九識（松長有慶『訳注 即身成仏義』）。

⑯不倒不謬…（逆さまに映す）顛倒もなく（まちがったものを映す）誤りもない

■あとがき

最後に、近く私家版で出版予定の『松岡正剛『空海の夢』を読む』から『即身成仏義』に関する一章を取り出し、締めくくりとしたい。

.....

第十九章 即身成仏義体験

この章は、松岡さんの「即身成仏」の誤解からはじまる。

その誤解とは、「二経一論八箇の証文」と言われる「二頌八句」に「即身仏」のことが書かれていないという勘ちがい。松岡さんにしてからが、「即身成仏」とは「即身仏」、すなわち山形県など見られる「土中成仏」した山岳修験行者の遺骸「生きながら仏になること」、つまり「ミイラ」になることだと思いついていたと言う。高野山の奥の院で、生きて瞑想行の姿のまま遷化した宗祖大師の「留身入定」とも思いを重ねていたのだろう。

さらに、松岡さんは「即身成仏」を「即座のサトリ」と思い込み、高校時代から親交のあった禅の稲垣足穂に言われた、盤珪和尚の「そのまま禅」を「即身成仏」だと勘ちがいをした。

*空海は『即身成仏義』全体を通して、「身」についてはさかんに議論を展開しているが、「即身」の「即」については「常の即時即日の如く、即身の義もまたかくの如し」とか、「不離はすなわちこれ即の義なり」と言う程度で、ほとんどくわしい定義はしていない。(略)わたしはこの「即」を(略)第二段階目の誤解、つまり「即座のサトリ」というふうには誤解したのであった。

*これは、禅に言うところの「即座の悟」と通じるのではないか、(略)盤珪和尚永琢の不生禅、いわゆる「そのまま禅」

をすらおもいあわしていた。

高校時代から禅道場に通っていた松岡さんは、道元にはじまって中国禅へ、そしてこの頃、京都桃山の稲垣足穂に接していた。その稲垣足穂が「やっぱり禅は盤珪はんがおもしろいなあ」と言った、と。松岡さんは稲垣足穂をよく書いたり、書いたり話したりする時にもよく口にしていた。稲垣が「おもしろい」と言った盤珪の「法語集」の一文。

それから直に禅に取り掛かりまして、あそこな山に入つては、七日も物を食はず、

ここな巖に入つては、直に尖つた岩の上に着物を引きまくつて坐を組むが最後、

命を失うことも顧みず、自然と転けて落ちるまで坐を立たずに、食物は誰が

持つて来てくれようもござらねば、幾日も幾日も食せぬことがまま多うござつた。

*当時の私はまた「存在学」というものを考えていた。これは一口で言えば「いかにして存在的（オンティッシュ）なるものから存在学的（オントロギッシュ）なるものに向うのか」という新しい「存在の学」を、一方は西洋の物理学や生物学から、他方は東洋の宗教学や民俗学から、ともがらに蒸留してみようとする試みだった。こういうときに、空海の『即身成仏義』を読んだのである。まことに誤解が誤解を生んで、あげくに空海の見解を禅の側から評価するというような結構になったものだった。

松岡さんはもうハイデガーの存在論と向き合っていた。しかもハイデガーを東洋の宗教学や民俗学からも探ろうとしていた。しかし、「即身成仏」の誤解から「密教と禅」という玉が落ちた。

「密教と禪」。

松岡さんは早速、密教と禪の臨界面に立つ大好きな明恵上人を挙げ、次いで天台智顛の『摩訶止観』、そこに述べられる「空」「仮」「中」の「三諦」を挙げ、中国の華嚴で澄観の弟子宗密が「有教無観」の華嚴から禪へ向かったことを挙げ、江戸時代の律僧でサンスクリットの学僧でもあった慈雲飲光の「禪は即心即物、真言は即身成仏」を挙げる。松岡さんの言う意味での「密教と禪」には少々本格性と説得力に欠けるが、それは「それなりに難問のままながら」と自覚している。

ちなみに空海は、長安の留学中に中国に広がりつつあった禪を実際に見て知っていたであろうに、まったく禪には見向きもしなかった。頓悟でも漸悟でも、空海の「発心すれば即ち到る」にはサトリの速さで及ばなかったし、「言語道断」「不立文字」も、空海の「法身說法」「声字実相」には及ばなかった。

本題の「二経一論八箇の証文」である。

冒頭、小乗や大乘の顕教は永遠に近い長い修行の果ての「三劫成仏」を言うが、密教では次のように説かれている、と。

- ① 『金剛頂経』が言う、大日如来の三摩地を修する者の「仏菩提」。
- ② 凡夫・衆生が法身大日が説く教えに出会って、これを昼夜四時に精進して修すれば成就する「正覚」。
- ③ 勝義によって修すれば、現世に成就する「無上覚」。
- ④ 自身が「金剛身」となる（『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』）。
- ⑤ 「身秘密」。すなわち、「この身を捨てずして神境通を逮得し、大空位に遊歩して、而も身秘密を成ず」（『大日経』悉地出現品第七）。
- ⑥ 「悉地」。すなわち、「この生において悉地に入らんとおもはば、その所応にしたがつてこれを思念せよ」（『大日経』真言行学処品第七）。

⑦「即身成仏」。すなわち、「真言法のなかにも即身成仏するが故に、是れ三摩地の法を説く。諸教のなかにおいて闕して書せず」（伝龍樹作『菩提心論』）。

⑧「大覺の位」。すなわち、「もし人仏慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速やかに大覺の位を証す」（『菩提心論』）。

*空海は、成仏とは仏菩提であって正覺であって無上覺であるという等式をまず提示した。その等式はまだつづく。それはまた「金剛身」というものでもあって、それらがついに「身秘密」を完成させると主張する。「即身成仏〓仏菩提〓正覺〓無上覺〓金剛身」〓「身秘密」という関係だ。ここで先ほど例に出した「この身を捨てずして、神境通を速得し、大空位に遊歩して、而も身秘密を成ず」と言う『大日経』の一句が紹介される。

「大空位に遊歩する」とは、マルチン・ハイデガーの「Gelassenheit」や禪の「放下」に似ているが、密教（『大日経』）は身体を放棄しない。空海曰く「大空位とは、法身は大虚に同じで無碍なり」「衆象を含じて常恒なり、故に大空という」。松岡さんは、そこに身体を持ち込むのだと。何もない無礙の場所に身体を持ち込むとはどういうことか。空海曰く「その身体を法身すなわち大日如来の三密と同化すればよい」と。しかし誰もが容易に大日如来と同化できるわけではない。そこで、それを「身秘密」と言ったのである。

続いて後半、有名な「二頌八句」である。

1 六大無礙常瑜伽 六大無礙にして常に瑜伽なり

2 四種曼荼各不離 四種曼荼各々離れず

- | | | |
|---|---------|---------------|
| 3 | 三密加持速疾顯 | 三密かじすれば速疾に顯わる |
| 4 | 重々帝網名即身 | 重々帝網なるを即身と名づく |
| 5 | 法然具足薩般若 | 法然に薩般若を具足して |
| 6 | 心数心王過刹塵 | 心数心王刹塵に過ぎたり |
| 7 | 各具五智無際智 | 各々五智無際智を具す |
| 8 | 円鏡力故実覺智 | 円鏡力の故に実覺智なり |

松岡さんの解説。

- 1 地・水・火・風・空・識の六大が溶融して永遠である。
- 2 四種類のマンダラが互いにつながりあっている。
- 3 その中でわれわれと仏との間の三密が応じあう時、
- 4 あらゆる身体が帝網の球さながらに照射しあって「無碍」という即身性を發揮する。
- 5 ありとしあらゆるものに薩般若（一切智）がそなわり、
- 6 それはすべての人々の心数心王（心）においても「無数」に及んでいるのだから、
- 7 そこには五智も無際智もあまねく「輪円」に達しているはずで、
- 8 その智慧をもつてすべてを鏡のように照らし出せば、かならずやおのずから「真理」にめざめる。

これに松岡さんは、密教学的な註釈を加える。松岡さんにしては珍しくかなり専門性に富んだ解釈で、空海密教を知らない人には余計わからない。私なりに補えば、

1 広いこの世界に存在する、ありとあらゆるものの元となっているのは「六大」（地・水・火・風・空と識）で、「六大」はそれぞれお互いにかかり合い（相即相入して）、相互依存の関係にある。それ自体で存在しているものではない（無自性・空）。無垢清浄なものである。あらゆるものはこの「六大」を元として存在する（六大能生）。

2 その「六大」が生み出した（六大能生の）マンダラに、「大（現図）マンダラ」と「法（種字）マンダラ」と「三昧耶（象徴）マンダラ」と「羯磨（所作）マンダラ」という四種があるのだが、それら四種は本質的に一つのものであり、仏尊等の表現方法がちがうだけである。

3 そのマンダラの仏尊のどれか一つを選び（結縁）、その仏尊の「印」を自分も結び、その仏尊の「真言」を唱え、その仏尊のすがたを自分の心中に観想して、自分とその仏尊とが一体となって感応し合えば（三密加持）、自分の身体がその仏の仏身と等しくなった状態が瞬時に顕わになる。

4 その「三密加持」の境地というものはあたかも、ヒンドウの雷神インドラ天の稲妻の網の如く、帝釈天（インドラ天が転じた仏教の護法神）の宮殿のかざり網にちりばめられた寶石が、互いに照らし合うのと同じく（重々帝網）、マンダラの仏尊と「重々帝網」の状態になっていることを「即身」と言うのである。

5 その境地においては、さながらに、仏の智慧（一切智、あらゆる事物・現象が無自性・空であると見抜く智慧）が心に具わり、

6 六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）や八識（六識に、自我意識の末那識と根本識としてのアーラヤ識を加えたもの）といった認識主体（心王）や、それに相応する認識作用（心数）は無限であるが、

7 その各々に、大日如来の五智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）やその他の限りない仏の智慧が具わっている。

8 それら仏の智慧は、あらゆるものが鏡に映るように、行者の心の大きく丸い鏡に映し出される真実の智慧である。

これなら少しはわかるだろうか。

ここからは、松岡さんがいつも問題にしていた「即身」という意味についてである。

松岡さんはよく、高野山大学創立百周年記念に行われた国際シンポジウム「高野山サンギータイ（即身）―人間の可能性を求めて」の総企画とナビゲーターを担当した際、「即身」を英語でどう表現するか、種々検討して、私の記憶にまちがいがなければであるが、「in this existence」としたと言っていた。シンポジストのウィルソン・カブラ・ワトソンや松長有慶先生と議論を重ねたのだろう。松岡さんはこの「即身」という言葉の概念に相当苦勞をしたようだ。空海が自明のことのようにして、はつきり言わなかったからである。

『金剛頂経』では、「釈迦の成道」（菩提寺下でサトリを得たこと）を、一切義成就菩薩（釈迦）の「仏身円満」（宇宙法界に遍満する一切の如来たちがそうあるように、そのように私もある）金剛界如来となって金剛界会の如来のネットワークに相入（瑜伽）する」という場面設定になっている。釈迦の成道を密教はこのように説明したのである。

そのことを空海は租借して「二頌八句」で言い換えている。松岡さんはやはり「即身」がお気に入りで、こう結んでいる。

*互いの宝珠が互いに鏡映しあっているホロニックなネットワークを、そのままそれ自体として「即身」ととらえた思想的直感は、世界哲学史においてもとくに傑出するものだ。そこには現代科学の最先端のフィジカル・イメージさえ先取りされている。

*「帝網のイメージ」は、密教的生命を得ることによって現代につながったのである。空海はそれだけで満足したのではない。その「帝網のイメージ」が身体のコズミック・リズムと同調していることに気がつく。

宗祖大師の「重々帝網名即身」は、アーサー・ケストラーの「ホロン」(ホロニックシステム)やアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの「有機体論」に千年以上も先んじていた。「空海の夢」を書いた頃の松岡さんは、とくにホワイトヘッドの「有機体論」にはブギウギだった。

この稿を書くにあたり、とくに参照させていただいた『訳注 即身成仏義』『即身成仏義』(『弘法大師空海全集』第二巻)、そして『空海の夢』、その著者でそれぞれ親交をいただいていた松長有慶先生・松本照敬師・松岡正剛さん、そろってあつという間に惜別の人となってしまうた。今はただ、瞑目して感謝・合掌するのみである。

令和六年師走 納めの大師の日

草学道人 長澤弘隆